

日本地質学会 *News*

Vol.28 No.6 June 2025



一般社団法人日本地質学会

The Geological Society of Japan

理 事

任期：2024年6月8日から2026年総会

会長（代表理事） 山路 敦（京都大学）

副会長 杉田律子（科学警察研究所）
星 博幸（愛知教育大学）

常務理事 亀高正男（大日本ダイヤモンドコンサルタント（株））
副常務理事 内野隆之（産業技術総合研究所）
執行理事 岩井雅夫（高知大学）

内尾優子（東京国立博物館）
大坪 誠（産業技術総合研究所）
尾上哲治（九州大学）
加藤猛士（川崎地質（株））
小宮 剛（東京大学）
坂口有人（山口大学）
高嶋礼詩（東北大学）
辻森 樹（東北大学）
細矢卓志（中央開発（株））
松田達生（工学気象研究所）
山口飛鳥（東京大学大気海洋研究所）
矢部 淳（国立科学博物館）

理 事 青矢睦月（徳島大学）
天野一男（東京大学空間情報科学研究センター）
磯崎行雄（東京大学）
大友幸子（山形大学）
岡田 誠（茨城大学）

笠間友博（箱根町役場）
加藤 潔（駒澤大学）
香取拓馬（フォッサマグナミュージアム）
金丸龍夫（日本大学）
神谷奈々（京都大学）
川村紀子（海上保安庁海上保安大学校）
清川昌一（九州大学）
桑野太輔（京都大学）
小松原純子（産業技術総合研究所）
齋藤 眞（産業技術総合研究所）
佐々木和彦（佐々木技術士事務所）
澤 燦道（東北大学）
沢田 健（北海道大学）
沢田 輝（富山大学）
下岡和也（関西学院大学）
菅沼悠介（国立極地研究所）
高野 修（石油資源開発（株））
田村嘉之（千葉県環境財団）
中澤 努（産業技術総合研究所）
西 弘嗣（福井県立大学）
野田 篤（産業技術総合研究所）
広瀬 亘（北海道立総合研究機構）
松田博貴（熊本大学）
道林克禎（名古屋大学）
矢島道子（東京都立大学）
山本啓司（鹿児島大学）
和田穰隆（奈良教育大学）

監 事

任期：2024年6月8日から2028年総会

岩部良子（応用地質（株））
山本正司（山本司法書士事務所）



一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-8-15 井桁ビル

電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156（振替口座 00140-8-28067）

e-mail: main@geosociety.jp ホームページ <http://geosociety.jp>

日本地質学会 *News*

Vol.28 No.6 June 2025

The Geological Society of Japan News

一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル 6F

編集委員長 松田達生

TEL 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156

main@geosociety.jp (庶務一般)

journal@geosociety.jp (編集)

http://www.geosociety.jp

Contents

案内……2

第41回ゼオライト研究発表会

公募……2

東京大学大気海洋研究所教員(助教)公募/東京理科大学教養教育研究
院野田キャンパス教養部教員公募(専任教員)/北海道大学大学院
理学研究院地球惑星科学部門地球惑星システム科学分野教員公募

各賞・研究助成……3

「STI for SDGs」アワード募集/2025年度後期「NHKアーカイブス学
術利用」公募/2025年「海のフロンティアを拓く岡村健二賞」受賞候
補者募集

博物館・ジオパークで地球を学ぼう! (41) ……4

薩摩川内市甕ミュージアム: 地域に支えられた島の博物館(山下大
輔)

新刊紹介『大地と人の物語ー地質学でよみとく日本の
伝承』……6

日本地質学会編「大地と人の物語」出版記念 特別販
売キャンペーン……7

TOPIC……8

中教審の答申「知の総和」とレイトスペシャライゼーションへの対
応策(坂口有人)

地質学雑誌: 新しい論文が公開されています……10

2025年度会費督促請求に関するお知らせ……11

表紙紹介……11

第16回惑星地球フォトコンテスト: 優秀賞 朝日を浴びて(芝崎静
雄)

CALENDAR……12

学会記事……13

2024年度第4回理事会議事録

2024年度第11回執行理事会議事録

2024年度第12回執行理事会議事録

入会申込書……18

巻末 会費口座振替依頼書

訂正

ニュース誌6月号掲載の熊本大会予告記事中に、誤りがあ
りました。下記の通り訂正いたします。

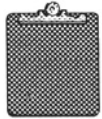
p. (9) セッション一覧

T14. 九州火山のテクトニクス

(誤) 招待講演者(予定): 趙 大鵬(東北大学, 非会員), 柵山
徹也(大阪公立大学, 会員)

(正) 招待講演者(予定): 趙 大鵬(東北大学, 非会員), 三好
雅也(福岡大学, 正会員)

印刷・製本: 日本印刷株式会社 東京都豊島区東池袋4-41-24



ご案内

国会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します。

第41回ゼオライト研究発表会

主催：一般社団法人日本ゼオライト学会
協賛：一般社団法人日本地質学会ほか
日時：2025（令和7）年11月27日（木）～28日（金）
会場：富山国際会議場（〒930-0084富山市大手町1-2）
テーマ：ゼオライト、メソ多孔体、およびその類縁化合物に関連した研究の基礎から応用まで
講演申込締切：2025年9月19日（金）
予稿原稿締切：2025年10月24日（金）（9月中に執筆要領をお送りします。）
参加登録費：本研究会の発表および参加には、参加登録が必要です。本年度はPayventによる登録および決済を行います。2025年8月1日（金）以降、下記URLから参加登録と参加費の支払いを行ってください。なお、研究発表会当日の参加登録はございませんのでご注意ください。
懇親会：2025年11月27日（木）講演終了後、富山県民会館8階（申込締切：2025年11月21日）
研究発表会の開催に関する最新の情報はホームページ（<https://jza-online.org/events/>）に随時掲載いたしますので、適宜ご覧いただきますようお願い申し上げます。
問い合わせ先：椿範立（富山大学）、田口明（富山大学）
TEL:076-445-6925, Email:atagu@ctg.u-toyama.ac.jp（田口）

公募

教員・職員公募等の求人ニュース原稿につきましては、採用結果をお知らせいただけますようお願い致します。



東京大学大気海洋研究所教員（助教）公募

職名及び人数：助教1名
採用予定時期：2026年1月以降のできるだけ早い時期
任期：5年（但し、審査を経て1回に限り5年以内で再任されることがあります）
試用期間：採用された日から14日間
就業場所：大気海洋研究所（千葉県柏市柏の葉5-1-5）
変更の範囲 本学の指定する場所（配置換え又は出向を意に反して命じられることは原則ない。詳細は東京大学教員の就業に関する規程第4条による。）
所属：海洋地球システム研究系 海洋底科学部門
公募の趣旨及び業務内容：海洋地球システム研究系海洋底科学部門では、地質学・地球物理学・地球化学の先端的探査・計測・計算機によるモデリング等の手法を駆使することにより、過去から現在に至る、海洋を中心とする大気・海洋・陸上・雪氷圏を含む地球システム変動とそれに伴う物質循環及びダイナミクスを包括的に解明することを目指しています。また、当部門では、研究目的を達成するために、国内共同研究にとどまらず国際的なプログラム（IODP3, IPCC, ICDP 等）を部門一体として積極的に推進しています。本公募では、調査・観測を主体として、海洋地球システムの成り立ちと変動を明らかにする研究を地質学や岩石学など物質科学的な手法をもとに意欲的に展開し、研究コミュニティを牽引していく方を求めます。さらに、当所が大気海洋科学共同利用・共同研究拠点であることを踏まえ、柏地区および大槌・奄美地区の陸上研究拠点、共同利用研究船白鳳丸・新青丸等を活用した国内共同利用研究および国際共同研究を支えていくことを期待します。また、大気海洋科学に関わる人材を育成するため、大学院教育にも積極的に携わっていただきます。本公募は「東京大学ダイバーシティ&インクルージョン宣言」のもと、「東京大学男女共同参画加速のための宣言」に基づき女性の応募を歓迎します。変更の範囲 配置後、兼務及び出向を命じることがあります（意に反して命じられることは原則ない。詳細は東京大学教員の就業に関する規程第4条による。）
応募資格：博士の学位を有する者、または着任日までに取得見込みの者

応募書類提出期限：2025年8月29日（金）17時必着

問い合わせ先：
〒277-8564 千葉県柏市柏の葉5-1-5
東京大学大気海洋研究所 海洋底科学部門 横山祐典
Tel: 04-7136-6141
email: yokoyama@aori.u-tokyo.ac.jp

東京理科大学教養教育研究院 野田キャンパス教養部教員公募 （専任教員）

公募人員：准教授または講師（1名）
任期：定年制（65歳となる年度の末日）
所属：東京理科大学教養教育研究院野田キャンパス教養部
勤務地：雇入れ直後：東京理科大学 野田キャンパス。変更の範囲：法人の定める場所
業務内容：雇入れ直後：専攻分野についての学生の教授、その研究の指導、及び研究に当たる但し、上記以外の業務を命じることがある。変更の範囲：法人の定める業務
専門分野：地学（鉱物・地形）、地学教育
担当予定科目：教職課程科目の地学および地学実験、一般教養科目の地球科学入門およびエネルギーと環境
着任日：2026年4月1日
応募資格：博士の学位を有する方。学部と大学院の教育並びに研究に熱意を持って取り組んでいただける方。
応募締切：2025年8月31日（日）まで
書類提出先：以下の応募フォームからご提出ください。
応募フォーム：https://tus.qualtrics.com/jfe/form/SV_6KKUzFHBciNGRFQ
問い合わせ先：東京理科大学教養教育研究院 野田キャンパス教養部部長 鈴木智順
chijyun@rs.tus.ac.jp

北海道大学大学院理学研究院 地球惑星科学部門地球惑星 システム科学分野教員公募

募集人員：助教1名
所属：（雇入れ直後）大学院理学研究院地球惑星科学部門地球惑星システム科学分野
専門分野：同位体や微化石に基づく層序学、または環境DNAなど遺伝子情報を活用した古生物学
職務内容：（雇入れ直後）（1）地球惑星システム科学関連の学部・大学院教育（全学教育を含む）に係る教育研究に従事する（2）本分野の教員と協力し、大学運営に参画する（変更の範囲）大学の定める業務
応募資格：（1）博士号を取得していること（採用予定日までに学位取得見込みの場合も

含む) (2) フィールドをベースとした教育 (野外実習の担当を含む)・研究ができる方
採用期間: 2026年1月1日以降のできるだけ早い時期

試用期間: あり (3ヶ月)

任期: 5年。なお再任審査により任期を更新する場合がある (再任の場合の任期は5年、1回を限度とする)。また、再任後の任期中ないし任期終了時に、審査を経て任期のないポストへ移行する場合がある。

提出期限: 2025年9月1日 (月) 必着

提出先・問い合わせ先: 〒060-0810札幌市北区北10条西8丁目

北海道大学大学院理学研究院地球惑星科学部門地球惑星システム科学分野

栗谷豪

電話: 011-706-2729 FAX: 011-706-2729

電子メール: kuritani@sci.hokudai.ac.jp

提出書類等公募の詳細は、下記を参照してください。

<https://www.hokudai.ac.jp/introduction/recruit/koubo/>

各賞・研究助成



日本地質学会に寄せられた候補者の募集・推薦依頼等をご案内致します。

「STI for SDGs」アワード募集

科学技術振興機構 (JST) では、科学技術・イノベーションを用いて社会課題を解決する取り組みを対象とした「STI for SDGs」アワードの2025年度の募集を行っています。

このアワードでは、活用する技術の種類やレベルは問わず、独自性や展開性に優れた取り組みを表彰し、それらの取り組みの推進と他での活用を進めることでSDGs達成への貢献を目指しています。

大学や企業などでの研究成果の活用、自治体が地域と連携して行っている活動、企業におけるESG経営・サステナビリティ・インパクト経営などを意識した事業や社会貢献活動、NPOによる活動、大学のサークル活動や高校の部活動 (大学生以下対象の「次世代賞」あり) など、多様な取り組みのご応募を歓迎します。

サステナブルな未来のために、皆様からの多数のご応募をお待ちしています。

募集締切: 2025年7月16日 (水) 正午

表彰内容:

文部科学大臣賞1件

科学技術振興機構理事長賞1件

優秀賞 数件

次世代賞 数件

奨励賞 数件

詳細 URL: <https://www.jst.go.jp/ristex/sdgs-award/index.html>

お問合せ先:

国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST)

社会技術研究開発センター (RISTEX)

「STI for SDGs」アワード事務局

E-mail: sdgs-award@jst.go.jp

2025年度後期 「NHKアーカイブス学術利用」 公募

NHKでは、アーカイブス保存の映像・音声を学術研究に利用していただく研究を募集しています。採択研究者は、埼玉県川口・NHKアーカイブス、大阪放送局の閲覧室で希望のコンテンツを閲覧することが出来ます。

本公募は、NHKアーカイブスの保存番組を研究者の方に研究利用していただくためのものです。

2016年度より「NHK番組アーカイブス学術利用トライアル」の公募事業を展開していましたが、2024年度より、トライアルから新たに本運用「NHKアーカイブス学術利用」に切り替えさせていただき、おかげ様で2025年度前期の公募においては、19件のご応募をいただきました。

閲覧期間: 2025年10月~2026年3月 (1組30日まで利用可)

対象者: 大学、高等専門学校、公的研究所所属の職員・研究者、大学院生

締切: 2025年7月31日 (木)

募集数: NHKアーカイブス4組、大阪放送局2組

応募要項はホームページをご覧ください。

<https://www.nhk.or.jp/archives/academic/index.html>

2025年「海のフロンティアを 拓く岡村健二賞」 受賞候補者募集

選考基準:

(1) 日本の海洋開発について、先行的・共通の技術開発の必要性、重要性を認識し、機器開発や深海技術の研究開発に取り組み、顕著な成果をあげた若手研究者に対し「海のフロンティアを拓く岡村健二賞」を授与します。

(2) 過去2年間の間に、海洋関連の内外の学会等において一編以上の査読付論文の発表を行った者で、論文発表時の年齢が40歳以下の者を対象にします。候補者の性別、現住所の国内外は問いません。

(3) 論文発表期間は2023年4月1日~2025年3月31日までの期間で、内外の学会等で論文発

表の実績がある者が候補対象となります。

(4) 公募手続きは、自薦もしくは大学、研究機関等から選考委員会への推薦によるものとします。

(5) テクノオーション・ネットワークが設置する「海のフロンティアを拓く岡村健二賞」選考委員会で選考を行い、これに基づいて理事会が表彰対象者を選定し、会長が決定します。

(6) 受賞者は、2025年11月27日 (木) から29日 (土) に神戸で開催される「Techno-Ocean 2025」にて表彰されます。

(7) 受賞者には、賞状と副賞金が贈呈されます。

応募方法: 今回の対象期間内 (2023年4月1日から2025年3月31日) における公表論文の発表者から自薦もしくは推薦にて公募を行います。推薦者は、「候補者推薦書」に必要事項をご記入のうえ該当論文のコピーを添付して、事務局まで郵便または添付ファイルにてE-mailでお送りください。

応募締切: 2025年8月22日 (金)

お問い合わせ先: 〒650-0046 神戸市中央区港島中町6-9-1

一般財団法人神戸観光局内 テクノオーション・ネットワーク事務局

TEL (078) 303-0029 FAX (078) 302-6475

E-mail techno-ocean@kcva.or.jp

<https://www.techno-ocean.com/news/2025/05/2482/>



図1 甕ミュージアム外観

info

薩摩川内市 甕ミュージアム

〒896-1392

鹿児島県薩摩川内市鹿島町蘭牟田1457番地10

電話：09969-4-2211

HP：https://www.city.satsumasendai.

lg.jp/koshikimuseum/index.html

開館時間：9:00～17:00（入館は16:30まで）

地域に支えられた島の博物館

薩摩川内市甕ミュージアム 学芸員 山下大輔

2025年4月1日、鹿児島県薩摩川内市の離島、甕島（こしきしま）に「甕ミュージアム」がオープンしました。元々は村役場であった3階建の建物を改修した小規模な博物館で、甕島産の化石や岩石など約1,000点を展示しています。今回は、当館の特徴や取り組みについてご紹介します。

1. 断崖と魚とDr.コトー診療所

甕島は、鹿児島県薩摩半島の西方沖約30kmに位置し、上甕島・中甕島・下甕島の3つの有人島と、それに伴う小さな島々からなります。一般的には、漫画やドラマで人気を博した「Dr.コトー診療所」の舞台として知られ、釣り人にはメジナやアオリイカの聖地として人気です。ナポレオン岩に代表される断崖や、トンボロなどの海岸景観、カノコユリの咲く草原、そしてキビナゴやヒゲナガエビなどの豊かな海産資源に恵まれ、過度に観光地化されていない素朴な島であることから、近年注目を集めています。

2. 鹿児島県初の恐竜化石

甕島に分布する白亜系は、1902年に伊本常誠氏により初めて分布が示され、1954年に松本達郎氏によって、熊本県天草地域に分布する姫浦層群と対比されました。それ以降、多くの層序学的・古生物学的研究が行われてきましたが、2008年に下甕島鹿島町に分布する姫浦層群から、鹿児島県で初めてとなる恐竜化石が発見されました。それは、地質調査中の熊本大学の大学院生が偶然見つけた、長さ約2cm小型獣脚類の歯です。その後、国立科学博物館と熊本大学を中心とした発掘調査団

が組織され、獣脚類の肋骨やワニの歯や骨、カメの甲羅などが見つかりました。

2009年には、ウミネコ留学（離島留学）で下甕島に来ていた中学生が発掘体験会で4cmほどの獣脚類の歯の化石を発見。この化石から、全長7mほどの肉食恐竜がいたことがわかりました。それ以降も、恐竜化石の発見が相次ぎ、2011年には国内初、アジアでも3例目となるケラトプス類の歯の化石が、2012年には竜脚類恐竜の歯の化石が見つかり、様々な恐竜たちが生息していたことがわかってきました。

3. 甕島の地層と化石の特徴

当館の特徴をご紹介する前に、まずは甕島の地層と化石の特徴をまとめます。甕島の大地は、主に姫浦層群（白亜紀後期）、上甕島層群（古第三紀前期）、花崗岩類（新第三紀）の3つの地層からできています。花崗岩類や第四紀の砂州地形なども魅力的なのですが、ここからは、姫浦層群と上甕島層群に話を絞ってご紹介します。キーワードは「時代」と「環境」です。

(1) 時代—白亜紀後期と古第三紀前期の地層 1つ目の特徴は、白亜紀後期の地層と古第三紀前期の地層が分布している点です。これらの地層は「日本の地質百選」にも選ばれており、小さな島にもかかわらず、恐竜時代の最後と哺乳類が栄え始めた時代の両方を調べることができます。

たとえば、2016年に上甕島で初めてとなる恐竜化石が見つかりました。長さ70cmほどの黒い丸太のような形をした化石で、甕島産の化石の中で最大のものです（図2）。約1

年半に及ぶクリーニング作業の結果、ハドロサウルス類の左大腿骨であることが明らかになりました。この化石は約7,000万年前の白亜紀最末期（マーストリヒチアン期）の地層から発見されたため、日本で最も新しい時代の恐竜化石の一つとして注目され、国立科学博物館の「恐竜博2019」でも展示されました。

また、上甕島に分布する上甕島層群中甕層からは、ネコやイヌの先祖とされるミアキス科の歯や、プロントテリウム科の下顎の化石などが報告されており、国内最古の古第三紀哺乳類化石群集とされています。哺乳類の化石は研究途上のものがほとんどなので、現在の展示ではCT画像とともに研究の様子を紹介しています。今後研究の進捗に合わせて、展示を更新していく予定です。

(2) 環境—陸と海の両方の化石 2つ目は、陸生と海生の両方の化石が見つかる点です。白亜紀後期～古第三紀前期の甕島は島ではなく、ユーラシア大陸の東の端に位置していました。当時の前弧海盆で堆積した姫浦層群と上甕島層群は、蛇行河川でたまった陸の地層と、潮間帯～浅海～陸棚斜面で堆積した海の地層からなるため、陸と海の両方の化石が見つかります。

たとえば陸の生き物としては、恐竜化石に加え、硬鱗魚の鱗やカメの背甲、ワニの歯や胴椎などが挙げられます。また、花粉や胞子の化石も見つかっており、その種類から白亜紀後期の甕島周辺は、熱帯から亜熱帯の植物が分布し、マングローブが生い茂る河口が広がっていたと考えられています。

海で堆積した地層からは、二枚貝、アンモナイト、オウムガイ、サメ、ウミガメなどの化石がたくさん見つかります。二枚貝やウミユリ、コケムシの中には新種の化石も見つかっており、甕島の地名がついた種類もいます。

2014年には下甕島の姫浦層群からモササウルス亜科の歯が見つかりました。1cmほどの小さな歯で、北海道や四国のマーストリヒチアン階から見つかっているモササウルス亜科と同じ特徴を示します。2階の常設展では、小型のモササウルス類であるクリダステスの骨格標本とともに展示中です。

続いて、2018年には海ワニ類の歯も見つかりました。2.5cmほどの少し捻れたベグ状の歯で、現生のインドガビアルの歯とよく似ています。白亜紀の海生ワニ類の化石は世界的



図2 ハドロサウルス類の大腿骨（手前が実物、奥は欠損部を復元したレプリカ）

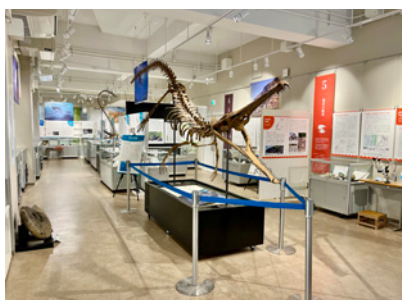


図3 2階常設展示室



図4 鹿島断崖を望む百合草原（当館から徒歩約15分）

にも珍しく、北西太平洋地域では2例目の発見です。2階の常設展では、海ワニ類の姿形が伝わりやすいように、比較標本として約7mのテルミノナリスの骨格と一緒に展示しています（図3）。このように、陸と海の両方の情報が得られるのも甕島の地層の特徴の一つです。

4. 甕ミュージアムの5つの特徴

甕島で採取された標本は、甕島で収蔵・展示し、研究・教育に役立てるのが理想的であるという考えのもと、2015年に薩摩川内市鹿島支所（当時）内に「甕ミュージアム恐竜化石等準備室」を開設。それから10年の準備期間を経て、今年の春に「甕ミュージアム」がオープンしました。当館の特徴としては主に次の5つが挙げられます。

(1) **甕島産の化石と岩石で1億年の地球史を辿る** 当館では、甕島をテーマとした島の博物館というコンセプトのもと、甕島産の化石や岩石を使って、約1億年間の甕島の大地の歴史を辿っていくという展示構成にしています。また、陸生と海生の化石が見つかるため、来館者がどこの世界の展示を見ているかがわかるように、時代と環境でゾーン分けをした展示になっています（図3）。具体的には、2階の常設展が5つの章に分かれており、時計回りに見て回ると、約1億年前の変成岩類から現在の甕島までを辿ることができます。古い方から順に、「1章 甕島の大地」、「2章 白亜紀の海の世界」、「3章 白亜紀の陸の世界」、「4章 古第三紀の世界」、「5章 現在の甕島」という区分です。それぞれの章を構成するパネルの中身は、化石・岩石・地形について、一般的な説明をした後、甕島の標本からわかることやその重要性について詳しく解説しています。島の標本で島の地史を語るというコンセプトが来館者の方に伝わるか不安でしたが、実際に開館してみると「この博物館は地元の化石がたくさん展示してあっていいね」というお声をいただきました。

(2) **展示は学芸員の手作りで更新が容易** 展示制作を専門業者に依頼すると、デザインも凝った美しい展示ができますが、制作に多額の費用がかかったり、展示の中身の更新がしにくいなどの欠点もあります。そこで当館では、展示パネルとショーケースの組み合わせを基本スタイルとして、学芸員が展示のほぼ



図5 地域住民によるクリーニング作業

全てを手作りしています。とは言っても、学芸員は空間や印刷物のデザインに関して素人なので、色や文字のフォントの設定、パネルのデザインについては、専門書などで学び、展示が少しでも見やすく、わかりやすくなるように心がけて制作しています。こうすることで、学芸員の負担は増えますが、最新の研究成果に合わせて展示を自由に更新していけるという大きなメリットがあります。特にここは離島の博物館であるため、他の博物館に比べてリピーターの確保が困難です。その一方で、甕島の地質・化石の研究は、近年盛んに進められており、今後も新しい研究成果が期待されます。そのため、最新研究を定期的に発表し、それに合わせて展示を更新することができれば、何度も通いたくなるような博物館になるのではないかと期待しています。

(3) **野外の見どころが近い** 当館の強みの一つは、野外の見どころが近い点です。たとえば、当館から歩いて近くの展望所に登ると、迫力のある姫浦層群の断崖（海蝕崖）がすぐに観察できます（図4）。島内にはこうした地層や化石、第四紀の砂州地形などを観察できる箇所が点在しており、さらに風衝草原や渡り鳥のやってくる湿地など、現在の生き物たちを観察できる場所もあります。そのため、2階常設展の後半では、プロジェクションマッピング立体地形模型（島の方々の声で解説が流れます）と写真展示「野外への誘い」を設置して、現在の甕島の見どころを紹介し、来館者が野外へ出かけて本物の自然に触れてもらえるような誘導をしています。

(4) **地域住民に支えられた博物館** 島住民の方々には、2008年の恐竜化石発見当初から、調査研究、展示制作、教育普及の面で多くのサポートをいただいています。年に2回行っている集中発掘調査では、地域の方々も参加され、複数の大学や博物館から集まる研究者や大学生と一緒に発掘を行います。甕島産の化石は黒いものが多く、偽造やノジュールと混同しやすいことから、初心者が化石を見つけるのは困難です。そんな中、何年も発掘に参加されている地域の方は目が慣れているため、化石をよく見つけてくださいます。また、甕島の調査は陸からアクセスできない海岸線で行うことが多いため、頼りになるのが地元漁師さんの漁船です。複雑な海底地形を熟知した漁師さんだからこその操舵技術により、安全な調査ができています。



図6 中級クラスの子供達による化石の紹介

見つけた化石のクリーニング作業を担当しているのも地域の方々です（図5）。15年以上の経験のあるスタッフの技術は目を見張るものがあり、視察に来たアメリカの博物館の研究者も舌を巻くほどでした。化石と岩石の境目を探りながら削るのが特に難しいのですが、長年の経験と勘に裏打ちされた職人技によって、日々化石たちが削り出されています。このように、調査研究の最も重要な部分を支えているのも地域の方々です。

他にも、当館の完成記念式典では、地域の方々による「タルナイ」ともち投げが行われました。新築祝いの習わしであるタルナイの開催は、実に16年ぶり、太鼓三味線の音色に合わせて地域の方々や来賓の方々が踊り、大変盛り上がりしました。

(5) **甕島の自然を活かした体験プログラム** 当館では、毎月第3土曜日に化石プログラムを行っています。野外観察をしたり、工作をしたりしながら、甕島の地層や化石について楽しく学ぶイベントです。初級と中級があり、初級クラスに15回参加した人は中級クラス（奇数月開催）に参加することができます。中級クラスでは、火山の噴火実験を通して、鹿児島島の溶結凝灰岩について学んだり、イカを解剖してアンモナイトの軟体部を想像したりと、より専門的な内容を学びます。3月末に行った内覧会では、中級クラスの子供達が来賓の方々に甕島の化石を紹介してくれました（図6）。他にも、夏休みには実際の化石発掘現場にて、発掘体験会も行っており、県外からも多くの子供達が参加します。体験で見つけた保存状態のよい化石は発見者の写真と共に展示中です。地元の鹿島小学校の子供達は体験プログラムに参加できる機会が多いため、鹿島小学校が受け入れている「ウミネコ留学生」では、近年、恐竜好きな子供達の申込が増えているようです。

おわりに

当館には、古脊椎動物学（恐竜）と層序学（微化石・古地磁気）を専門とする2名の学芸員が在籍しておりますが、甕島の地層や化石は種類が豊富なため、我々学芸員だけでは手に負えないほど、たくさんの研究の切り口があります。本稿を読んでくださった皆様とも、甕島の自然史を探究できたら幸いです。皆様のご来館をお待ちしております。

新刊紹介『大地と人の物語ー地質学でよみとく日本の伝承』

日本地質学会編，創元社2025年6月10日発行，判型：A 5判，168頁，ISBN：978-4-422-44047-7，
定価：2,860円（税込）



本書の出版のきっかけは、2023年1月に日本地質学会のジオパーク支援委員会が開催したオンラインシンポジウム『ジオパーク地域に伝わる伝承と地質学ー古代からの自然観を今に活かす』でした。このイベントに参加して下さった創元社の方から、「本にしませんか？」という声がかかり、内容をさらに充実させて出版することになりました。このアイデアのものは、2021年に行われた全国ジオパーク大会で、日本各地に伝わる伝承や神話と自然とのつながりが紹介されたことにあります。

これまで本学会で、伝承や神話のような話を科学の視点からとらえる試みはありませんでした。今回のシンポジウム、本書の出版ともに、文化人類学や民俗学で扱われてきたようなテーマを、自然科学の目で読み解こうとする新しいチャレンジです。最近では文化地質学という分野も注目されていて、地質学が理系・文系の枠をこえて、さまざまな分野をつなぐ役割を果たしつつあります。本書もその一例です。

伝承や神話が長く語り継がれてきた背景には、話す人と聞く人の間で共有される理解があったのではないかと、私たちは考えています。フランスの人類学者レヴィ＝ストロースも、昔の人たちも自然をよく観察し、自然現象を深く理解していたと述べています。

地震や火山の噴火など、自然災害が多い日本では、こうした伝承・神話が自然との付き合い方を伝えていることもあります。そうした知恵や経験を、現代の科学と組み合わせることは、私たち地質学者にとっても大切な課題です。日本列島は変動帯にあり、地震や火山など地質的な変化が多く見られます。だからこそ、全国各地にユニーク

なジオパークがあり、そこには地域の自然と関わる多くの伝承や神話が残っています。本書の著者は、そうしたジオパークに関わった活動をしている地質学者や専門員です。多くの方々に、伝承や神話を通して地質学にも関心を持ってもらえるように願っています。

本書は2部構成です。第1部（総論）では、神話と地質学をつなぐ地球神話という新しい考え方を紹介し、ジオパークが大切にしている地球の記憶や地質遺産について解説します。第2部（各論）では、主に全国のジオパークを舞台に、自然と人々の暮らしがどのように物語として語り継がれてきたかを、カラー写真や図を使って紹介しました。

総論

第1章：大地から生まれる物語ー地球神話への誘いー

第2章：地球をよみとくストーリーージオパークの歴史と活動ー

各論

第1章 アイヌ民族の伝承とジオパークー神々と人間の交わる世界ー

第2章 磐梯山の岩なだれが造りだした地形・奇岩ー「宝の山」に伝わる伝説と昔話ー

第3章 関東地方の大地震と鯰伝説ー地震を起こした鯰の正体は？ー

第4章 大男が射抜いた穴 星穴伝説ー奇岩の山・妙義山にまつわる伝説ー

第5章 浅間山と鬼伝説ー火山の噴火は鬼のしわざ？ー

第6章 糸魚川ジオパークの景観ー奴奈川姫と大国主命の伝説からたどるー

第7章 熊野の神話と火成岩ー古事記・日本書紀からみるー

第8章 豊岡盆地の成り立ちとアメノヒボコ伝説ー日本海形成と玄武洞ー

第9章 わら蛇の祭りと伝説ー大蛇が語りかけるー

第10章 「こし」のヤマタノオロチ 火山説の再考ー洪水の化身か、火山噴火の化身かー

第11章 国引き神話と島根半島ー神が土地を引っ張ってきた！ー

第12章 阿蘇カルデラの歴史と神話ー地形・地質の特徴からひもとく地震・地球の動きー

コラム

- ・ジオパークことはじめ
- ・災害教訓を伝える自然災害伝承碑
- ・“さざれ石”と“たもと石”
- ・身近にもある？ 化け物と化石の接点
- ・自然災害と天然記念物

（文責：野村律夫・天野一男）

地質学会会員限定 特別割引販売キャンペーン

本書含め、創元社商品全品1割引！

詳しくは次ページチラシを参照してください

日本地質学会編
『大地と人の物語』
出版記念

日本地質学会
会員限定

特別販売 キャンペーン

10%
OFF



新刊『大地と人の物語』をはじめ、創元社HP内の商品を
全品1割引にて販売いたします！
ご注文時に下記のクーポンコードを入力してください。

クーポンコード

chishitsugakkai2025

クーポン使用期限

2025年7月10日～2025年8月25日

※本クーポンはおひとり様1回限りご利用いただけます

クーポン特典

創元社商品全品1割引



2025年6月
刊行

↓↓↓ 創元社ホームページはこちら ↓↓↓

<https://www.sogensha.co.jp/>

※創元社HP会員に登録しなくてもご購入いただけます
※詳しくは創元社HP内「ご利用ガイド」をご覧ください

HP会員に登録
するとさらに
特典がたくさん！



大地と人の物語 地質学でよみとく日本の伝承

日本地質学会編
A5判・並製・168頁 定価2,860円(税込)

大地にまつわる神話や伝説を地質学の観点で考察し
地球科学のおもしろさと人々の想像力の豊かさを味
わう、文化×地質学の入門書！

「地球神話」への
いざない



図書出版
創元社

<https://www.sogensha.co.jp/>

〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-3-6 TEL 06-6231-9010 / FAX 06-6233-3111

今回の答申・問題提起

中央教育審議会から「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）」が2月21日に公表された（以下、今回の答申と呼ぶ）。今回の答申の特徴は、学生一人一人の能力を高める質の向上、18歳人口減に伴う大学規模適正化、高等教育へのアクセス確保などがあり、それらを実現する手段として文理融合のレイトスペシャライゼーション（以降LSと呼ぶ）が強調されている。本稿はこのLSを中心に論じる。

これまでの大学教育では、学部の卒業要件の約120単位のうち、約40単位分を教養教育に、約80単位分を専門教育に充てるといった専門教育主体の教育であった。これに対してLSは学部教育のほとんどを教養教育に充て、専門教育は大学院で行うというものである。すなわち学部の専門教育の大幅削減を意味する。

2040年には大学入学者が現状よりも3割近く減少すると見込まれている（文部科学省、2025）。おそらく各大学の交付金・助成金もこれに合わせて大幅にカットされ、それぞれの大学内において選択と集中が進むと予想される。その際に文系と理系を統合した大規模な学部が生まれ、4年間を幅広い教養教育だけが行われれば、各分野の教員は少数で事足りるため、かなり的人员削減を進める事が可能になる。このプロセスにおいて学内で地質学の必要性が十分に理解されていなければ地質学学科・コースの消滅が危惧される。

ここに至る経緯

1990年代以降の大学改革において、大学には「社会ニーズを踏まえた高等教育」「第三者評価による質の保証」「国際通用性」が求められ続けてきた。そして従来の専門教育に対して批判が繰り返されてきたが、基本的には専門教育の立て直しが主題であった。しかし、ここ10年ほどの間に文理融合のLSという考えが前面に出てくるようになった。

ここ最近の動きとしては、AIの急速な発展が見込まれて、多くの仕事はなくなるという推定や（Frey and Osborne, 2013）、子供たちの65%が今はまだ存在しない新しい仕事に就くという議論が提起された（Davidson, 2011）。「Society 5.0 時代に向けた人材育成大臣懇談会」（文部科学省、2018）では、機械が人の仕事を代替して互いに複雑かつ高度に関係し合う社会において、サイエンスや数学、そして分析的に思考する力と全体をシステムとしてデザインする力が必要とされた。そしてAIにできない力として、現実世界を意味あるものと理解して新たなものを生み出していく力とされ、そのためには従来の専門教育ではなく、文理分断からの脱却が謳われた。しかし、その後、AIが仕事を奪うという議論に対して、AIはあらゆる職種に入り込むが職種を消失させないという反論が出された（Arntz et al., 2016）。また、子供たちは未だない仕事に就くと提起したDavidson教授自身が「全ての仕事が変わった」と表現を変えるなど（BBC, 2017）トーンダウンしていった。

これに代わって、第5期科学技術基本計画（内閣府、2016）では、Society 5.0というビジョンが打ち出された。これはAIの発達に伴う社会の大変革が起こりうることを前提としている。そのような社会では、高度な専門知識を持ちつつ普遍的な見方のできる能力が求められ、専攻分野の専門性だけでなく、思考力、判断力、俯瞰力、表現力、教養を身に付け、高い公共性・倫理性、論理的思考力を持つ必要があると議論された（文部科学省、2018）。そのためには既存の専門教育ではなく、文理横断型の教育に移行するべきだと論じられるようになった（文部科学省、2018）。

2020年に科学技術基本法が改正された。この法律にはかつて「科学技術（人文科学のみに係るものを除く）」との一文があった。しかし、人間や社会の在り方と科学技術・イノベーションとの関係が密接不可分になっていることを鑑み、人文科学を排除するという一文が削除された。この改正の過程では、専門主義がたこツボを作り、それが社会に災厄をもたらしかねない、たこツボの間を動き回り通訳する人間が10%程度必要、という議論も含みつつ、あらゆる分野の知見を総合的に活用して社会課題に対応していくという方針が示された（制度課題ワーキンググループ、2020）。法律改正を受けて内閣府から「「総合知」の基本的考え方及び戦略的に推進する方策 中間とりまとめ」が公表された（内閣府、2022）。ここでは、人文・社会科学と自然科学を含むあらゆる「知」の融合による「総合知」により、人間や社会の総合的理解と課題解決を目指している。ただし、専門知を疎かにするものではない、とも明記されている。そして2025年の今回の答申に至るが、それでも、専門知そのものの深掘り・広がりとともに、専門知を持ち寄って知の活力を生み出すとされており、専門知そのものは否定されていない。しかし専門知の深さと併せて、俯瞰的・横断的な視野を持つために文理融合のLS導入が必要と結論づけられており、学部における専門教育の重要性は顧みられていない。

この10年の間に、AIにできない人間の役割のためであったり、将来が見通せないからであったり、もしくは細分化した学問分野を俯瞰するためであったりと、理由はいろいろと変化してきたが、従来の専門教育には問題があり、学部では文理融合教育を導入すべきという結論は同じであった。

専門教育批判の背景

専門知は重要としながらもLSを推進して学部での専門科目の単位を減らすというのは、一見矛盾しているようにも見えるが、これは従来の専門教育に対する批判であり、大学教育そのものに対する不信感が背景にあるのかもしれない。

今から60年も前から既に「学生が勉強しないし大学もさせない」といった議論が国会でなされ（衆議院文教委員会、1966）、「大学とは何か」（文部科学省、1998）といった根源的な問いかけや、「日本の学士がいかなる能力を証明するものであるのか」（文部科学省、2008）といった痛烈な批判が繰り返されてきた。そして大学教員に対しても、社会のニーズを顧みずに「個々の教員が教えたい内容を教えている」（文部科学省、2018）という不信感が表明されてきた。これらに対して大学側は、シラバスや3ポリシーの整備、情報公開などに取り組んできたが、まだまだ不信感の払拭には至っていない。

今回の答申の弱点

その一方で今回の答申は、1990年代以降の大学改革における「社会ニーズを踏まえた高等教育」「第三者評価による質の保証」「国際通用性」という、長年の課題に対して踏み込みが甘いと感じる部分がある。

これまで、各分野において社会ニーズを汲み取った卒業生像を描き、そして卒業時まで身に付ける知識や技能・資質、そしてその定量的な水準を詳細かつ具体的に示したディプロマ・ポリシーを定め、それを実現するためのカリキュラムを組み立てるように求められてきた（文部科学省、2016）。例えば目指すべき卒業生像を地質技術者とすれば、岩石学、鉱物学、堆積学、地史学、構造地質学といった基礎知識、野外での地質調査能力、研究成果をまとめる能力といった技能などを、身に付けるべきものとして挙げることができる。

これに対して今回の答申では、専門知を組み合わせた総合知を社会ニーズと定めているため、主体性、リーダーシップ、創造力、課題設定・解決能力、論理的思考力、表現力、集中力、粘り強さ、コミュニケーション能力、人間力などを身に付けるべきとしている（文部科学省、2025）。そして、これを実現するために文理融合教育のLSが重要と説いている（文部科学省、2025）。今回の答申におけるこれらの社会ニーズ、到達目標、そして身に付けるべき知識・技能・資質は、いずれも抽象的で漠然としていると言わざるを得ない。そしてまた、達成すべき水準についても、今回の答申では在学中にどれくらい力を伸ばすことができたのか、といった定性評価の導入が議論されている。これも従来の議論から大きく後退している。やはり定量評価できる基準を定め、それに適合しているかどうかによって個々の授業の単位が厳格に認定され、そして規定のカリキュラムを履修することで、目指すべき卒業生像に至ると考えられる。これは特に国家資格と連動している教育プログラムには重要なポイントであるし、また卒業生を受け入れる社会にとっても、その学科・コースの学士がいかなる能力を証明するものであるのかを示す重要な指針になるであろう。

今回の答申では専門教育は大学院が担い、質の高い博士人材により高度専門人材が賄われることになっているので（文部科学省、2025）、学部での到達目標や水準は抽象的でも良いというロジックかもしれない。しかし、高度専門人材を博士だけで担うのは容易ではない。日本地質学会の調査では、全国の大学から毎年約200名の卒業生・修了生が地質技術職に就いている（佐々木、2025）。それでも業界では人手不足との声が根強いので、地質技術職に対する社会ニーズはこれよりも多いのであろう。それに対して博士の修了者は年間に40名程度にすぎず、その半数以上が研究職に就いている（佐々木、2025）。地質技術者の需要だけでも現状の5倍以上の博士が必要になり、とても現実的ではない。やはり学部から専門教育を行い、多くの卒・修了生が専門職に就くようにしなければ社会ニーズに応える事はできない。

大学教育に対する第三者評価も大学改革の長年のテーマである。現状では、第三者評価として大学全体を対象とした機関別認証評価が行われ、学部や学科、コース等の授業内容や単位認定基準などの詳細は自己点検でカバーする内部質保証が行われている。この内部質保証ですら今回の答申は負担が重いと捉えている。そもそもこの内部質保証は、かなり不十分なやり方である。その現状を学術論文の査読制度に例えると、出版社の健全性は確認するが、その雑誌に掲載される論文のひとつひとつは査読しない、という状態である。やはり論文のひとつひとつについて査読は行われるべきであり、そのことによって論文の質と信頼性が向上する。同様に、大学教育の質保証として、教育主体である学科やコースを対象とした詳細な第三者ピアレビューを積極的に受け入れるべきである。そういった大学教育の審査機関として、医学分野では日本医学教育評価機構（JACME）、看護学分野では日本看護学教育評価機構（JABNE）、理工農情報分野では日本技術者教育認定機構（JABEE）などが整備されており、これらへの受審率を向上させていくことが筋であろう。

国際通用性は今回の答申でも重要と強調され、国際的な大学間連携やデジタル学習履歴証明が対応策として挙げられている。しかし、特定の大学間のみでしか通用しない状態や、卒業生が学修履歴をもって自らの能力・資質・水準を説明しなければならない状態というのは、大学の国際通用性として十分とは言えない。大学教育においても国際認証制度が運用されている分野があり、そういった分野では学科・コース単位で国際認証

を受けることで国際通用性が確保されている。地質学分野では幸いことにJABEEがワシントンアコードの協定加盟団体であるため、JABEEの認定を受けている学科・コース等の教育は国際的同質性が保証されている。これは留学生の大学選びや、卒業生が海外での業務に携わる場合にも重要であるが、その学科・コースの学士がいかなる能力を証明するものであるのか、という大学の価値そのものを国際的に証明するものでもあり、大学の国際認証はきわめて重要である。

対応案

文理融合のLSが本格的に導入されると専門教育および地質系の学科・コース等が大幅に削減される可能性があり、何らかの手立てが必要になる。ひとつの案として、大学改革の長年の課題である「社会ニーズを踏まえた高等教育」「第三者評価による質の保証」「国際通用性」に正面から取り組み、今回の答申の更には先を行く教育像を示すのも生き残り戦略としてあり得るのではないだろうか。

大学において基礎研究や真理探究を行うという事と、社会と向き合うという事は何ら矛盾するものではない。むしろ地質関連の業界から「学部段階から、地史学、堆積学、岩石学、鉱物学、古生物学、構造地質学、地質調査法、野外巡検などをしっかり教えてください」と要望してもらえればありがたい。今回の答申では特に地域社会ニーズが強調されているので、たとえば各都道府県の地質調査業協会などに協力を依頼する方法もあるだろう。また、学内での選択と集中においても、顔が見えるレベルの地元業界から専門教育の継続を要望してもらえれば力強い援護になるだろう。

そして今回の答申が提言している定性的な評価に取って代わる質保証に積極的に取り組む事も重要であろう。論文の査読制度が研究の質保証の重要な一翼であるのと同様に、教育にも学科・コース単位での第三者ピアレビューを受け入れて、授業一つ一つのレベルにまで外部の目が入り得るようにすべきである。地質学分野にはJABEEがあるので、この審査を受けるのが良いだろう。JABEEは大学の質保証に既に25年以上も取り組んでおり、ピアレビューによる大学教育向上のノウハウを十分に有している。また、JABEEから認定されれば、同時に国際認証を得る事になる。国際認証は今回の答申を上回る明確な国際通用性となる。

まとめ

18歳人口の減少に連動して交付金や助成金が大幅にカットされる可能性がある。そうなれば各大学の学内での選択と集中が進むだろう。その際に文理融合のLSは定員削減のツールになる危険性がある。専門教育を守るために、今回の答申よりも先進的な高等教育像を示すという手もあるだろう。例えば、地質業界から専門教育に対する要望を受け、社会ニーズを踏まえた具体的な到達目標を掲げ、それを具現化する教育を行い、第三者ピアレビューでその質を保証し、国際認証を取得して国際通用性を確立し、多くの卒業生たちを専門職種に送り出すというアプローチもあるだろう。

これが唯一解ではないだろうが、いずれにしても全国の多くの地質系の学科・コースが今後も維持発展されていくことを願っている。大学自らが、より積極的に教育の質保証を図り、国民から信頼されるように努力することが、学問の自由を守るために重要なのではないだろうか。

※引用文献は、学会ホームページに掲載しています。

<https://geosociety.jp/faq/content1216.html>

地質学雑誌

地質学雑誌は、2022年（128巻）からは完全電子化となりました。会員の皆様に、公開されている新しい論文をご紹介します。ぜひJ-STAGE上で本論文を閲覧してください。QRコードからも各原稿にアクセスして頂けます。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/geosoc/-char/ja>

新しい論文が公開されています

論説

山陰バソリス中央部の高田花崗閃緑岩における多段階マグマ注入の岩石学的証拠

中山瀬那, 遠藤俊祐, 亀井淳志

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2025.0009>

西南日本の山陰バソリス中央部に分布する高田花崗閃緑岩は、ジルコン U-Pb 年代により長期間にわたるマグマ活動が提案されている。本岩体は、普通角閃石黒雲母花崗閃緑岩を主岩相とし、苦鉄質マグマ（小木石英閃緑岩）とのミングリングを示す組織がみられる。また、高田花崗閃緑岩の構成鉱物にはオシラトリ一累帯構造（例えば斜長石のアノーサイト成分、チタナイトの Zr やアルカリ長石の Ba）や再融解組織が普遍的に観察される。角閃石やチタナイトを用いた地質温度圧力計を適用すると、180~200 MPa の定置圧力条件でソリダス付近での温度変動を示唆する。また、全岩 Rb-Sr 同位体組成は、良好なアイソクロンを形成しなかった。これらは、苦鉄質マグマに加え、起源物質の同位体不均質をもつ広義の花崗岩質マグマの複数回の注入を示唆しており、これが高田花崗閃緑岩の長期間にわたるマグマ活動の実態と考えられる。



報告

Improved definition of the Cretaceous paleomagnetic pole for southwest Japan using the 100 Ma Hayama Formation

Koji Uno, Haruki Suga, Kuniyuki Furukawa

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2025.0008>

This study updates the mid-Cretaceous (100 Ma) paleomagnetic pole for the inner arc of the southwestern Japanese islands, referred to as southwest Japan, to investigate potential stagnation in its apparent polar wander path (APWP). The updated pole interpolates the Cretaceous APWP for southwest Japan, providing insights into the geodynamic characteristics of the region during this period. For paleomagnetic analysis, red mudstone samples were collected from four sites in the 100 Ma Hayama Formation in the Hayama area. A high-temperature remanent magnetization component, carried by hematite, was isolated from the four sites, passing the fold test. The primary nature of the magnetization was confirmed by the detrital origin of the magnetic carrier. The primary directions, combined with previously reported results, were used to define a



paleomagnetic pole representing the 100 Ma pole for southwest Japan, located within the group of Cretaceous poles. The APWP for southwest Japan between 110 and 70 Ma was revised to evaluate stagnation in polar motion in this region.

レター

ジルコンのU-Pb法と (U-Th) /He法から推定された北海道南西部、長万部地域（黒松内低地帯）の約1 Maのテフラ

伊藤久敏, Martin Danišik, 鴈澤好博

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2025.0007>

Zircon double-dating (U-Pb and (U-Th)/He) was performed on a tephra in the Pleistocene Chiragawa Formation, Oshamambe district (Kuromatsunai lowland), southwestern Hokkaido. The obtained ages were 1.035 ± 0.048 Ma and 1.030 ± 0.054 Ma, respectively, which are mutually consistent. These results indicate that the zircons from this tephra crystallized in a magma at ca. 1.0 Ma and an eruption producing the tephra happened instantly. The applied methodology appears to be robust for dating Quaternary volcanic activity, similarly to another zircon double-dating (U-Pb and fission-track) approach. Furthermore, U-Pb dating of a tephra in the Pleistocene Setana Formation yielded an age of 1.063 ± 0.037 Ma. These results indicate that the depositional age of the Setana Formation is in close agreement with previous estimates, but that the Chiragawa Formation, which was previously assumed to be Middle Pleistocene, is Early Pleistocene. The ages also indicate that the Setana and Chiragawa formations were deposited in a very short time interval.



論説

礼文-樺戸帯に属するサハリン南部モネロン島の白亜紀島弧火山岩

相澤正隆, 岡村 聡, 西戸裕嗣

<https://doi.org/10.5575/geosoc.2025.0006>

サハリン南西部のモネロン島から得られた深部ボーリングコア中の白亜紀火山岩類は、玄武岩質から安山岩質の島弧マグマ組成を有し、礼文-樺戸帯に属する。モネロン島火山岩のHFS元素組成はN-MORBに類似し、イザナギプレートの沈み込み時にスラブ堆積物メルトの寄与量が減少していたことが示唆される。西太平洋周辺のテクトニクスは、主に花崗岩質岩の研究により、約127 Maごろのファラロン-イザナギ海嶺の沈み込みと、56-46 Maのイザナギ-太平洋海嶺の沈み込みに伴う火成活動の停止、およびマントル組成の置換が議論されている。一方で、モネロン島火山岩に関する本研究の同位体データは、本地域周辺におけるイザナギ-太平洋海嶺の沈み込み前後でのマントル置換を否定する。花崗岩質マグマは地殻成分の影響を強く受けていることが多いため、スラブ-マントル相互作用の解明には、玄武岩質の岩石を用いることが重要である。



2025年度会費督促請求に関するお知らせ

2025年度会費およびそれ以前の未納会費がある方に対して、請求書（郵便振替用紙）を6月12日に発送しました。

早急にご送金くださいますようお願いいたします。また自動引落については、6月23日に引落しを行います。

※2025年度分会費が未納の場合は、7月号からのニュース誌の送付を一時的に中止させていただきます。

※2025年度分の学生会費申請は受付を終了しています（遡っての申請はできません）。

長期未納者の雑誌バックナンバーの送本について：3年度分以上の未納会費をお振込みされる方で、未納期間中（送本停止中）の雑誌バックナンバーの送付を希望する方は、郵便振替用紙のチェック欄にて、意思をお示し下さい。チェックが無い場合は最新号のニュース誌から送本再開します。地質学雑誌は128巻（2022年1月）から、完全電子化されました（J-STAGE上にてフリーアクセスにてご覧いただけます。）。2022年1月以後、冊子体はニュース誌のみ発行しています。

一般社団法人日本地質学会 運営財政部会

TEL：03-5823-1150 e-mail：main@geosociety.jp

表紙紹介

第16回惑星地球フォトコンテスト：優秀賞 朝日を浴びて

写真：芝崎静雄（愛媛県）

撮影場所：高知県 竜串海岸

撮影者より：地震による海底地すべりでできたと考えられる欄間石や蜂の巣状の穴がみられます。自然が生み出した奇岩がたくさん見られます。朝陽を待って撮影しました。

審査委員長講評：足摺岬の近くにある竜串海岸は砂泥互層がつくる奇勝で、多数の写真が撮影されています。陸側から海側に向かっての構図が多いのですが、この写真は海側から陸側を撮影したもの。この配置によって地層を立体的にみせることができます。山の端から昇ってきたばかり太陽を配置すると露出の調整が大変ですが、うまく処理されています。

地質解説：中新統三崎層群は、高知県南西端の土佐清水市に分布する。日本海の拡大時期に前弧海盆を埋めた地層です。竜串海岸では、本層群最上部を構成する竜串層の下部が露出しており、波浪やストームの作用が卓越した沖浜漸移帯～外浜の堆積物を観察できます。写真中央より向かってやや左側の欄間石（砂岩）は、コンボリユート構造が日本の建築様式にみられる「欄間」を思わせるところが名前の由来です。他にも三崎層群には未固結時の変形構造が発達しており、その多くは地震動に関連してできたとされています。また、写真中央のストーム成砂岩層の手前側などに点々と見られる赤茶けた丸い塊は、酸化鉄の薄い被膜に覆われた炭酸カルシウムの球状コンクリーション（ノジュール）です。もう一つ、現地に行くと砂岩表面の所々に蜂の巣状の穴が発達しています。これは塩類風化による微地形“タフオニ”です。（藤内智士：高知大学）

CALENDAR

2025.7～

地球科学分野に関する研究会、学会、国際会議、などの開催日、会合名、開催学会、開催場所をご案内致します。会員の皆様の情報をお待ちしています。

★印は学会主催、(共) 共催、(後) 後援、(協) 協賛。

2025年

7月 July

(後) 第62回アイソトープ・放射線研究発表会

7月2日(水)～4日(金)

会場 日本科学未来館 7階 未来館ホールほか(東京・お台場)

<https://pub.conf.it.atlas.jp/ja/event/jrias2025>

三浦半島活断層調査会 創立30周年記念講演会

三浦半島の大地を知り減災を考える

7月6日(日) 13:00-16:00

会場：横須賀市自然・人文博物館 1階 講座室

当日先着80名(申込不要)

連絡先：三浦半島活断層調査会 事務局(青木方)

メール：atsumi-aoki[at]mcko.jp

第204回深田研談話会

大地震はどのように発生するのか：地質学と地震学の学祭的立場からの考察

7月11日(金) 15:00-16:30

会場：深田地質研究所研修ホール+オンライン

講師：遠田晋次(東北大学災害科学国際研究所)

要事前申込・参加費無料

<https://fukadaken.or.jp/>

8月 August

東京地学協会【地図講座2025】

8月7日：講座A「Web地図で教材化、授業づくりにはひと工夫」

8月7日：講座B「3次元地質地盤図で読み解く首都圏の地盤と災害リスク」

10月19日：巡検C「地形図を持って、河岸段丘の崖線、湧水、断層地形を観察しながら歩く」

11月16日：巡検D「河川争奪など地形地質の成因と人間の関わりを考えながら歩く」

参加費無料、非会員も歓迎。

<https://www.geog.or.jp/lecture/info/2025-05-27/>

(後) 科学教育研究協議会2025年第71回大会

8月8日(金)～10日(日)

会場：中央大学附属高等学校(東京都小金井市)

<https://kakyokyo.org/>

9月 September

第10回ぼうさいこくたい2025 in 新潟

9月6日(土)～7日(日)

場所：朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター

<https://bosai-kokutai.jp/2025/>

(後) 第68回粘土科学討論会

9月10日(水)～12日(金)

会場：産業技術総合研究所臨海副都心センター(東京都江東区青海2丁目3-26)

<https://www.cssj2.org/event/annual-meeting/>

日本鉱物科学会2025年年会・総会

9月10日(水)～12日(金)

会場：山口大学吉田キャンパス共通教育棟

<https://pub.conf.it.atlas.jp/ja/event/jams2025>

(共) 19th International Conference on Thermochronology

(第19回国際熱年代学会議/Thermo 2025)

9月14日(日)～20日(土)

会場：金沢商工会議所(金沢市尾山町9-13)

<https://smartconf.jp/content/thermo2025/>

★日本地質学会第132年学術大会(2025熊本大会)

9月14日(日)～16日(火)

会場：熊本大学黒髪地区

(共) 2025年度日本地球化学会第72回年会

9月17日(水)～19日(金)

口頭発表(ハイブリッド)、ポスター発表(対面)

場所：東北大学・川内北キャンパス

<https://www.geochem.jp/annual-meetings/latest-annual-meeting>

(後) 第6回アジア恐竜国際シンポジウム

9月26日(金)～30日(火)

会場：福井県立大学永平寺キャンパス(福井県吉田郡永平寺)

<https://dinoasia.asia/>

第42回歴史地震研究会(豊岡大会)

9月27日(土)～29日(月)

場所：芸術文化観光専門職大学(兵庫県豊岡市山王町7-52)

<https://www.histeq.jp/kenkyukai.html>

10月 October

2025年度日本火山学会秋季大会

10月1日(水)～3日(金)

会場：キッセイ文化ホール(予定)(長野県松本市水汲)

<http://www.kazan-g.sakura.ne.jp/J/index.html>

2025 NEA IDKM Symposium

主催：OECD/NEA(ホスト機関：NUMO)

10月7日(火)～9日(木)

会場：パシフィコ横浜

サイトツアー(10/10)：東京電力廃炉資料館、福島第一原子力発電所(予定)

<https://geosociety.jp/outline/content0255.html#10>

Magellan Plusワークショップ：Land-to-Sea Shaking Studies (L2S3-WS)(海底・湖底堆積物を用いた地震履歴研究に関するワークショップ)

10月21日(火)～24日(金)

場所：国立台湾大学(台湾・台北市)

国内問い合わせ先：池原研(産総研)／中西諒(京大大学)

<https://sites.google.com/view/land2sea-workshop/home>

11月 November

国際 Gondwana 研究連合(IAGR) 2025年総会及び第22回 Gondwana からアジア国際シンポジウム

11月2日(日)～6日(木)

会場：延世大学新村キャンパス(韓国ソウル)

2日：参加登録とアイスブレイカー

3日・4日：シンポジウム、総会、晩餐会

5日・6日：野外討論会

[http://www.gondwanainst.org/symposium/2025/IAGR/IAGR 2025 Circulars.docx](http://www.gondwanainst.org/symposium/2025/IAGR/IAGR%2025%20Circulars.docx)

(協) Techno-Ocean 2025

11月27日(木)～29日(土)

会場：神戸国際展示場2号館ほか(神戸市中央区港島中町6-11-1)

<https://to2025.techno-ocean.com/>

(協) 第41回ゼオライト研究発表会

11月27日(木)～28日(金)

会場：富山国際会議場

<https://jza-online.org/event>

学 会 記 事

2024年度第4回理事会議事録

日時：2025年4月19日（土）14:00-17:00

【WEB会議形式】

出席役員：出席理事42名，出席監事2名

- ・会長1名：山路 敦
- ・副会長1名：杉田律子
- ・常務理事1名：亀高正男
- ・執行理事12名：岩井雅夫・保坂（内尾）優子・大坪 誠・尾上哲治・加藤猛士・小宮剛・坂口有人・高嶋礼詩・細矢卓志・松田達生・矢部 淳・山口飛鳥
- ・理事会議長1名：高野 修
- ・理事会副議長1名：野田 篤
- ・理事25名（議長・副議長を除く）：青矢睦月・天野一男・磯崎行雄・大友幸子・岡田誠・笠間友博・加藤 潔・香取拓馬・金丸龍夫・野口（神谷）奈々・川村紀子・桑野太輔・齋藤 真・佐々木和彦・澤 燦道・沢田 健・沢田 輝・菅沼悠介・田村嘉之・西 弘嗣・広瀬 亘・道林克禎・矢島道子・山本啓司・和田稜隆
- ・監事：岩部良子・山本正司，事務局1名：澤木寿子
- ・欠席役員：理事（8名）：内野隆之・清川昌一・小松原純子・下岡和也・辻森 樹・中澤 努・星 博幸・松田博貴
- ・議長により理事会の成立要件の確認がなされた。本日の出席者が42名，成立要件は理事総数50名の過半数26名以上であることから，本理事会は成立することが確認された。議決は出席者の過半数22名以上である。
- ・書記は田村理事，澤理事が指名された。
- ・開催に先立って，山路会長より日頃の理事の学会運営への協力等に対する謝辞が述べられた。

報告事項

1. 執行理事会報告（亀高常務理事）
亀高常務理事より，今年度第8～10回の執行理事会議事録および第11回執行理事会議事次第から，以下の点について報告があった。
 - ・執行理事会の会議時間を短縮し，開催日を平日に変更する方向で検討中，5月に試験的に実施する。
 - ・キャリアビジョン誌掲載企業は117社で過去最大になり，1月下旬に各大学に配布された。
 - ・地質標準化委員会の報告より，JISの修正内容が多く，再来年に全面改訂の予定。国際地質年代層序表（v2024/12）の日本語版を更新した。
 - ・ジオパーク学術支援連合（JGASU）の学会選出委員として天野一男理事が再任。
 - ・地理学連携機構，地理関連学校連合，人文・経済地理関連学会協議会合同総会（3/18亀高常務出席）参加報告。
2. 総務委員会（加藤猛士理事）

- ・2025年3月末時点の会員動静と，前回（12月）理事会以降の逝去会員6名の報告があった。報告の後，逝去会員に黙祷を捧げた。また，2024年度末退会および除籍予定者一覧を回覧し，確認した。
- ・永年会員顕彰者の報告。顕彰者は次の通り（敬称略）。
70年顕彰者：2名（1954年度入会者：2024年度会費まで納入済）後藤博弥，仲井 豊
60年顕彰者：6名（1964年度入会者：2024年度会費まで納入済）小澤智生，加瀬靖之，神谷英利，小勝幸夫，菅野耕三，早津賢二
50年顕彰者：42名（1974年度入会者：2024年度会費まで納入済）会田信行，浅川行雄，足立勝治，足立久男，大久保進，大塚富男，岡本正也，加藤芳郎，鎌田耕太郎，川原和博，鴈沢好博，木村 学，熊田政弘，公文富士夫，境垣内隆雄，坂本治，嵯峨山積，佐藤悦郎，佐野弘好，鈴木 哲，高須 晃，谷岡誠一，谷口純造，檀原 徹，鳥居 孝，長井孝一，中村盛之，中村由克，西ヶ谷修，野村律夫，濱田 治，原山 智，藤井光男，藤崎克博，藤本勝彦，古野邦雄，保科裕，前田仁一郎，益子 保，松本仁美，山崎孝成，吉水一郎
40年顕彰者：39名（1984年度入会者：2024年度会費まで納入済）五十嵐厚夫，池田剛，岩内明子，岩田昌寿，氏原 温，海野芳聖，笠原 茂，加藤 明，金子誓，亀尾浩司，木谷啓二，栗田裕司，五島 昇，金 秀俊，坂本 泉，佐々木和彦，菅原宏，杉山輝芳，関場清隆，竹下浩征，田中里志，田上洋人，中村晶平，七山 太，橋戸敬一郎，西 琢郎，布川嘉英，福田修武，藤田耕二，藤縄明彦，古澤 明，古谷茂継，細山光也，堀 利栄，町田隆史，松本宏彰，松村秀喜，水垣桂子，吉村実義
- ・大会運営費高騰により，2025年熊本大会から学術大会参加登録費を値上げする旨報告があった。コロナ禍明け2022年東京大会以降は赤字が続いており，値上げをしても熊本大会は赤字の見込みであることが説明された。
- ・学会オリジナルフィールドノートは在庫僅少により2025年度増刷予定。ただし，物価高騰により大幅な値上げが見込まれる。そのため，大口購入先に値上げ後の購入可否や仕様変更に関するアンケート調査をおこなった。それらも踏まえ検討した結果，ハードカバー，レインガード紙は維持しつつ，ある程度仕様を変更して1000円程度に価格を抑えて増刷する計画が説明された。
- ・学会活動における組織内のコミュニケーションツールとしてTEAMSの利用を開始する予定であり，希望する専門部会，委員会などで使用できるよう整備する。
- 3. 広報委員会（坂口理事・内尾理事）

- ・内尾理事より，学会Webサイトリニューアルの進捗状況について報告があった。仮サイトが作成され，画面デザインが共有された。スマホでも見やすい表示を製作中であることが説明された。順次作業を進行中。
- ・大坪理事より，SNS（X）のフォロワー数の増加が報告された。非会員のフォロワーが増えており，地質学会会員数を超えた。
- 4. 行事委員会（高嶋理事・山口理事）
 - ・2025年熊本大会の準備状況が報告された。市民講演会および地質情報展は科研費120万円が採択。市民講演会は，講演者に大橋智之氏（北九州市自然史歴史博）を追加し計4名の講師による講演を予定している。また巡検9コースについては，現在巡検案内書が編集集中。トピックセッションは15件を採択した。懇親会会場は上限200名であるため，早めの申し込みが必要であることが案内された。
 - ・2026年金沢大会については，巡検コース案の紹介があり，能登半島地震に関連した2コースも予定されている。2027年つくば大会については，会場と日程が調整中であることが報告された。大会委員長は氏家恒太郎会員。
- 5. 専門部会連絡委員会（尾上理事）
 - ・各専門部会の2024年度の活動報告が提出された。
- 6. 地質学雑誌編集委員会（小宮理事，代理亀高常務）
 - ・編集状況について報告があった。投稿数は堅調であること，2024年度学会各賞を受賞した方への投稿を促していることが報告された。
- 7. Island Arc編集委員会（辻森理事，代理亀高常務）
 - ・編集状況について報告があった。発行状況は例年並み。2024年インパクトファクター（IF）の予想値は1.24。
- 8. 地学教育委員会（岩井理事）
 - ・岩井理事より，大学入試センターへの意見書について報告があった。地学関連科目の平均点が他の理科科目に比べて低くならないように要望を行う。
 - ・地震火山地質こどもサマースクールは2025年度御嶽山，2026年度気仙沼で開催予定。27年度開催地がまだ決まっておらず，期日を延長して公募中。
- 9. 地質技術者教育委員会（加藤猛士理事）
 - ・第5回JABEEオンラインシンポジウム「高等学校での地学教育と大学での専門教育との連携」（3月2日）開催報告。動画はYouTubeで公開されている。
 - ・2023年度人材動向調査の結果が3月号ニュース誌に掲載された。
- 10. 生涯教育委員会（矢部理事）
 - ・2025年「地質の日」イベントとして，フォトコンテスト作品展示会をはじめ，今年も学会関連で多数のイベントが予定されている。詳細はWebサイトで確認してほしい。

いと案内があった。

- ・山路会長より、シニア会員へのアンケート実施結果について報告があった。対象者853名のうち243名からの回答があり、シニア会員間の交流促進、新知識への渴望、リモート講演会・学習会の多頻度化、居住地近くでの巡検、会費の値下げなど要望が寄せられた。また学会に対して協力できることとして、講演会等での講師役、巡検案内役として学問的な情報発信を希望する声が多数あった。引き続き、シニア層の満足度を上げる施策を検討することが報告された。
- 11. ジオパーク支援委員会（天野理事）
 - ・「大地と人の物語 地質学で読みとく伝承」の出版について状況報告があった。現在最終校正段階。6月上旬に創元社から出版予定。印刷費や通信費などの高騰により、企画提案当初より販売価格が上がる見込み（定価2,600円+税）。すでにAmazonなどに予約注文用の予告が掲載されている。
- 12. 支部長連絡会議（杉田副会長）
 - ・各支部の2024年度の活動報告が提出された。
- 13. 名誉会員推薦委員会（星副会長、代理亀高常務）
 - ・2025年度は名誉会員候補者の推薦はなかった。推薦募集に対する広報の改善も検討していることが報告された。
 - ・磯崎理事より、名誉会員の推挙は毎年3名程度の縛りがあるが、世代により人数に差があることから、前年の選考から漏れた推薦へのケアも必要ではないかとの意見があった。
- 14. 若手活動運営委員会（神谷理事）
 - ・地質系業界オンライン交流会（2/14開催）の実施報告があった。当日の参加者は25名。
 - ・今年度の活動計画として、熊本大会時に若手交流会、11月下旬～12月上旬にかけて埼玉県長瀬での若手巡検（日帰り）を計画している。また若手会員向けのメルマガ配信を開始する。メルマガは登録制ではなく、35歳以下の全会員を対象に配信する。

審議事項

1. 各種委員会メンバーの追加・交代
地質学雑誌編集委員会の小宮理事より、大友幸子会員（山形大）から乾 睦子会員（国士舘大）への委員の交代に関する説明がなされた。乾氏は文化地質学分野の原稿を担当予定。若手活動運営委員会の神谷理事より、都丸大河会員（東北大）、加藤広大会員（株）KANSOテクノスの2名を追加する提案がなされた。審議の結果、賛成多数で承認された。
2. 各種委員会規則の制定（加藤猛士理事）
4つの委員会（地質標準化委員会、地質学雑誌編集委員会、企画出版委員会、生涯教育委員会）の規則整理を行ったことについての説明があった。地質学雑誌編集委員会について

は、実際の運用に即したメール審議を認めるなどの変更点が説明された。審議の結果、賛成多数で承認された。

3. 各賞受賞者の決定（沢田理事）
各賞選考委員会の沢田委員長より、選考結果について報告がなされ、審議の結果、賛成多数で承認された。受賞者は以下の通り。
都城秋穂賞（1件）：ジェラル シェンゲオール氏
小澤儀明賞（1件）：松本廣直会員
論文賞（2件）：別所孝範ほか（2024）地質雑、130, 35-54/亀高正男ほか（2019）地質雑、125, 793-820。
小藤文次郎賞（1件）：岩森 光会員
研究奨励賞（1件）：米岡佳弥会員
フィールドワーク賞（1件）：松山和樹会員
学会賞及び欄山雅則賞は該当者なし。
なお、今年度は推薦数が少なく、特に専門部会からの推薦が少なかった。原因を調査し推薦数の増加を図る必要性が理事会へ申し送られた。これについては、部会内での議論や交流機会が減少していることが原因に挙げられ、従来のMLがメルマガ方式のシステムに変更され、使いにくいことも影響しているのではないかと、推薦を出さない部会に対して働きかけて推薦を促したいとの意見もあった。亀高常務理事からは推薦数の減少は執行理事会内でも問題視しており、学術大会ランチョンや夜間小集会所も活用して、部会活動の活性化を図っていただきたい旨コメントがあった。山路会長からは部会推薦だけでなく、会員個人の推薦も可能であるから、促進したいとの意見があった。
4. 研究奨励金支給対象者の決定（内野理事、代理亀高常務）
選考の結果について説明があった。支給対象者として4名（高橋恒佑会員、古庄航輝会員、鈴木捷太会員、福井堂子会員）を選考した。いずれも満額の20万円。選考基準についての質問があり、フィールドワークの重視、研究内容、支給される奨励金の使用用途などを考慮していることが説明された。審議の結果、賛成多数で承認された。
5. 地質学雑誌等デジタルアーカイブ化について（尾上理事）
2004年以前の地質学雑誌掲載論文は英語要旨がないものがあり、J-STAGE上の論文PDFが画像であるため自動検索に認識されないという問題が報告された。学術検討WGで検討した結果、1956-1998年の論文について、Abstractと日本語抄録をテキスト化することが提案された。費用見積は2025年度予算に計上されとの説明があった。審議の結果、賛成多数で承認された。
6. 地球・資源分野JABEE委員会の事務局機能の引継ぎ（加藤猛士理事）
地球・資源分野JABEE委員会の事務局機能を地質学会に引き継ぐことに関する説明がなされた。現在事務局は資源・素材学会が受けているが、今後地質学会が引き受けてほしいとの要望があった。業務委託契約となる予

定。2025年度は移行期間（引継ぎ）、2026年度より正式に引き受けることが補足された。審議の結果、賛成多数で承認された。

7. 2024年度事業実施概要（案）（亀高常務理事）
2024年度の学術大会、学術研究活動、出版活動等の報告がなされた。審議の結果、賛成多数で承認された。
8. 2025年度事業計画（案）（山路会長）
山路会長より2025年度の事業計画の説明がなされた。審議の結果、賛成多数で承認された。
9. 2024年度決算概算（案）（加藤猛士理事）
2024年度の決算の説明があった。収入について、会員数前年度比10名減で下げ止まり状態のため会費収入は前年度並みであった。補助金収入は、山形コンベンションからの学術大会助成金が大きかった。支出については、特に支部・部会等活動事業支出が減少した。これは支部活動がコロナ禍以前ほどに復調していないことが考えられる。各事業別にはプラス、マイナスがあるが、全体としてはバランスが取れたため、総収支は約24万円の黒字であることが報告された。審議の結果、賛成多数で承認された。
10. 2025年度予算案（加藤猛士理事）
2025年度の予算案の説明があった。収入については賛助会員増加、前年度並みの新規入会者を期待して会費収入の増額を見込んでいる。引当金の取り崩しは、学会HPリニューアル事業、フィールドノートの増刷、学術大会補填費用として予定していることなどが説明された。西理事より、HPリニューアルと地質雑のデジタルアーカイブ化のどちらの事業を優先して進めるのか、またアーカイブ化用の基金整備が必要ではないかとの質問があった。加藤理事からは、2025年度に両方の事業を進める予定であり、アーカイブ化は現時点では単年度事業として計画しているため、基金ではなく事業準備引当金より取り崩す旨回答があった。審議の結果、賛成多数で承認された。
11. 各賞関連の規則改正案（亀高常務）
各賞関連の規則（運営規則、各賞選考規則、選考委員会規則）改正案の説明があった。小澤賞、欄山賞、ナウマン賞、研究奨励賞、フィールドワーク賞対象者の対象期間が最大限活かせるよう、対象期間の期日変更を行う。学生優秀発表賞の対象者を「学生会員」から「学籍のある会員」とする（社会人ドクターや学生会員登録を行っていない会員も対象）。専門性を考慮した人選ができるよう、各賞選考委員を理事以外からも選考可能とする。利益相反の観点から、選考検討委員会から前・現会長を外す。などが説明された。金丸理事より学生優秀発表賞の「学籍のある会員」の証明やチェックはどのように行うのかとの質問があった。執行理事会、事務局からは、基本的には性善説に基づく自己申告であるが、講演申込の際に所属を明記するので問題ないとの回答があった。審議の結果、賛成多数で

承認された。

12. 総会議案の決定（亀高常務）

総会の議案内容について説明があり、審議の結果、賛成多数で承認された。

監事コメント

（山本監事）新会員管理システムの導入や各種規則の制定が進められており、学会運営は効率化していると評価している。会員数の減少が見込まれる中、運営や会員サービスが損なわれない範囲で、今後も効率化をすすめてもらいたい。

（岩部監事）若手活動が活発になっており、学生等に良い影響が広がっていると思う。シニア会員向けの内容も具体的な検討を進めて、シニアの活躍の場を作ってほしい。様々なリクエストや考え方を上手に汲み取って、活動・活躍の場を作り、会員の満足度を上げてもらいたい。

以上、この議事録が正確であることを証するため、議長、副議長および出席監事、理事は次に記名・捺印する。

2025年5月14日
一般社団法人日本地質学会
理事：議長 高野 修
理事：副議長 野田 篤

代表理事：会長 山路 敦
理事：副会長 杉田律子
理事：副会長 星 博幸
監事：山本正司
監事：岩部良子
理事：出席理事名（省略）

2024年度
第11回執行理事会議事録

日程：2025年4月19日（土）10:00-12:14

【WEB会議】

出席：山路 敦、杉田律子、亀高正男、岩井雅夫、内尾（保坂）優子、大坪 誠、尾上哲治、加藤猛士、小宮 剛、坂口有人、高嶋礼詩、細矢卓志、松田達生、矢部 淳、山口飛鳥

監事：岩部良子

欠席：星 博幸、内野隆之、辻森 樹、山本正司（監事）

事務局 澤木

*定足数（過半数：10）に対し、執行理事15名の出席

*前回24-10議事録案は、本執行理事会にて承認された。

報告事項（理事会報告の確認）

1. 全体的報告

・3/18（火）第16回 地理学連携機構、地理関連学会連合、人文・経済地理関連学会協議会合同総会参加報告（亀高常務出席）。

大学共通テスト科目「地理総合」・「地理探究」の動向や3団体の一本化などの議論があった旨報告があった。

2. 運営財政部会（加藤・細矢）

1) 総務委員会

＜共催・後援依頼、他団体の募集、連絡等＞

・科学技術振興財団より「青少年のための科学の祭典2024」の終了報告があった（日本地質学会後援）。2024/6/8-2025/1/26開催、来場者総数120,399名。

・科学技術振興財団より「青少年のための科学の祭典2025」各大会（2025/6/14-2026/1/25、全国29都道府県42会場で開催）への後援依頼があり、承諾した。

・地質調査総合センターより令和7年度運営体制の挨拶があった。センター長：中尾信典、副総合センター長：藤原 治（新任）ほか。

＜会員＞

1. 今月の入会者：賛助会員1社、正会員8名（一般2、シニア1、学生5）

賛助会員：株式会社地球科学総合研究所

正会員一般：黄 文成、片桐貴浩

正会員シニア：堀越 徹

正会員学生（単年度2名、2年バック1名、3年バック2名）：佐野友洋、辻 光彦、若山和真、窪田虎太郎、本田 花

2. 今月の退会者：なし

3. 今月の逝去者：1名

正会員シニア：橋本邦俊（逝去日：2025年2月21日）

4. 2025年3月末会員数

賛助36、名誉34、ジュニア会員6、正会員3022〔内訳 一般1935、シニア818、学生269〕、合計 3098（昨年比-3）

5. 2025年度永年会員顕彰者（89名）

70年：2名、60年：6名、50年：42名、40年：39名 を回覧資料で氏名にて確認した。

6. 前回（12/14）理事会以降の逝去者氏名（6名）（ ）の日付は逝去日

名誉会員（1）杉村 新（2025年3月1日）

正会員シニア（4）千代田厚史（2021年6月4日）、古川克彦（2024年11月27日）、徳山英一（2025年1月13日）、橋本邦俊（2025年2月21日）

正会員一般（1）松原尚志（2025年3月6日）

7. 年度末退会者&除籍者

①2024年度末退会者（81名）、②2024年度末除籍者（48名）を当日回覧資料にて氏名を確認した。

＜会計＞特になし

＜その他＞

・学術大会参加登録費改訂：一般会員の事前登録費を6000円→8000円に改定予定。そのほかの下院種別についても改訂する。ただし、学部学生、名誉会員については据え置き。

・フィールドノート増刷：一定の仕様を維持しつつ、紙質を見直し3000部発行、販売価格1000～1100円で進める方針。

・TEAMSによるファイル共有：ファイル共

有用ストレージとして6月の総会以降、各種委員会、専門部会からの申請に基づき順次開設予定。

3. 広報部会（坂口・内尾・大坪・松田）

1) 広報委員会（坂口・内尾）

・学会ウェブサイトのリニューアル進捗について：仮サイトが完成し、最新情報表示、スマートフォン対応などの機能が実装済み。今後コンテンツ精査と微調整を進行予定。

・SNS（旧Twitter）のフォロワー数が会員数を上回ったことについても報告された。

4. 学術研究部会（辻森・尾上・高嶋・山口）

1) 行事委員会（高嶋・山口）

・熊本大会では巡検案内書が順調に進行中。トピックセッションはすべて採択済み。

・金沢大会はLOCが組織され、巡検案も進行中。

2) 専門部会連絡委員会（尾上）

2024年の活動報告について14部会から活動報告を受領。構造地質部会からは未提出（→会議後提出）。

3) 国際交流委員会（辻森）

特になし

4) 地質標準化委員会（内野）

特になし

5) 学術戦略WG（尾上）

特になし

6) ショートコースWG（山口）

特になし。

5. 編集出版部会（小宮・辻森）

1) 地質学雑誌編集委員会（小宮）

（1）編集状況報告（2025年4月16日現在）

・2025年投稿論文：16（昨年比-4）〔内訳〕総説1（和文1）、論説8（和文8）、報告1（和文1）、レター2（和文2）、ノート1（和文1）、巡検案内書3

査読中31、受理済み1、入稿・校正中9、公開4

2) Island Arc編集委員会（辻森）

インパクトファクターが1.2程度となる見込みとの報告。

3) 企画出版委員会（小宮）特になし。

6. 社会貢献部会（矢部・岩井・坂口）

1) 地学教育委員会（岩井）

大学入試センターへの意見書原案を作成・配布済。特段の意見がなかったため提出予定。

2) 地質技術者教育委員会（加藤）

シンポジウム報告およびYouTube公開の案内。

3) 生涯教育委員会（矢部）

理事会で「地質の日」イベント（5月予定）について宣伝予定。

4) 地震火山地質こどもサマースクール（岩井）

特になし

5) 地質の日（矢部）

・5/10（土）「地質の日」オンライン一般講演会について、坂口理事に協力いただき添付のチラシを作成しWebページ等での広報を行なっている。13の関連学協会に広報

協力を依頼。

・5/11（日）街中ジオ散歩in Chiba「身近な地形・地質から探る稲毛海岸の歴史」の申し込みを4/15に締め切った。20名の応募があった。

・惑星地球フォトコンテスト第16回ほか入選作品展示会を東京パークスギャラリー（上野）で実施予定（5/13-25）。

7. その他執行理事会の下に設置される委員会及び組織

1) 利益相反マネージメント委員会（亀高）特になし

2) 若手育成事業検討WG（内野）特になし

3) 表彰制度検討WG（亀高）特になし

8. 理事会の下に設置される委員会

1) ジオパーク支援委員会（矢部）

・日本ジオパーク学術支援連合（JGASU）への学会選出委員について、委員の任期満了に伴い、天野一男氏（ジオパーク支援委員会委員長）を選出した旨報告（留任）。任期は2025年5月1日～2027年4月30日。

2) 地学オリンピック支援委員会（坂口）特になし

3) 支部長連絡会議（杉田）特になし

4) 地質災害委員会（松田）特になし

5) 名誉会員推薦委員会（星）本年度の推薦応募はなし

6) 各賞選考委員会（亀高）特になし

7) ジェンダー・ダイバーシティ委員会（山口）特になし

8) 法務委員会（亀高）特になし

9) 若手活動運営委員会（星）活動報告および今後の計画について理事会で説明予定。

9. 研究委員会

1) 南極地質研究委員会（委員長 大和田正明）特になし

2) 法地質学研究委員会（委員長 川村紀子；杉田）特になし

審議事項

1. 地質学雑誌等デジタルアーカイブ化について（尾上）

地質学雑誌のデジタルアーカイブ化に関して、1956～1983年の論文を対象に英語アブストラクトのテキスト化およびアーカイブ化を、1984～1998年の論文を対象に英語アブストラクトと日本語抄録のテキスト化およびアーカイブ化を行い、J-STAGE上に整備する方針が了承された。テキスト化にかかる費用については本年度予算に計上し、本日の理事会において審議・検討を進めることとなった。

2. 高等学校教科書（地学関係）に関する説明・意見交換会の開催について（星）

2025年熊本大会において、高等学校教科書（地学関係）に関する説明および意見交換会を、ランチョン等の形式で開催する方向で検討を進めることとなった。

3. 地球・資源分野JABEE委員会の事務局機能の引継ぎ（加藤）

JABEE委員会の事務局を地質学会事務局内に設置し、JABEEおよび構成学会との連携事務ならびに本委員会の運営事業を担う方向で検討を進めることとなった。活動の遂行に際しては、地質学会の財政や事務局への過度な負担が生じないよう、十分に配慮する。

4. シニア会員の活動について（杉田）

シニア会員が活躍できる場を創出・提供するため、今後、各担当業務部会において検討を進めることとした。

5. 理事会資料の確認（亀高）

議事次第ならびに報告事項・審議事項・審議資料の内容について確認を行った。

監事コメント

（岩部）本日の審議事項等に特段のコメントはなく、午後の理事会を経て総会に向けた準備を進めてほしいとの発言があった。

以上

2025年5月14日

一般社団法人日本地質学会
会長（代表理事）山路 敦
署名人 執行理事 亀高正男

2024年度 第12回執行理事会議事録

日程：2025年5月14日（土）18:30-00:00

【WEB会議】

出席：山路 敦、杉田律子、星 博幸、亀高正男、内野隆之、岩井雅夫、内尾（保坂）優子、大坪 誠、加藤猛士、小宮剛、坂口有人、高嶋礼詩、細矢卓志、松田達生、矢部 淳、山口飛鳥

監事：岩部良子

事務局 澤木

欠席：辻森 樹、尾上哲治、山本正司（監事）

*定足数（過半数：10）に対し、執行理事16の出席

*前回24-11議事録案は、本執行理事会にて承認された。

報告事項（理事会報告の確認）

1. 全体的報告

・125周年記念出版物「はじめての地質学（2017年9月発行）」の増刷が決定した。6刷、500部。累計9200部。

2. 運営財政部会（加藤・細矢）

1) 総務委員会

<共催・後援依頼、他団体の募集、連絡等>

・第68回粘土科学討論会（2025/9/10-12、産総研臨海副都心センター）への協力依頼があり、後援として承諾した。

・科学教育研究協議会第71回全国研究大会東京大会（2025/8/8-10、中央大学附属中学校・高等学校）への後援依頼があり、承諾した。

・2025年度日本地球化学会第72回年会（25/9/17-19、東北大学川内北キャンパス）への共催依頼があり、承諾した。

・京都大学工学部水曜会より「水曜会誌」休刊の連絡があった。

<会員>

1. 今月の入会者：正会員学生2名

正会員学生（3年バック（2名））

中澤栄子、石垣暁正

2. 今月の退会者：3名

正会員一般（3）

玄田貴之、松崎 西、固本悠杜

3. 今月の逝去者：1名

正会員シニア（1）

有川隆一（逝去日：2025年4月14日）

4. 2025年4月末会員数

賛助：37、名誉：34、ジュニア会員：6、正会員：3033〔内訳 一般954、シニア891、学生188〕 合計 3110（昨年比-2）

<会計>

・5/16の週に会計および業務監査を実施予定。

<その他>

・関東支部城ヶ島巡検（5/31-6/1）と清澄FC（8/25-30）への学生半額補助適用希望があった。

3. 広報部会（坂口・内尾・大坪・松田）

1) 広報委員会（坂口・内尾）

・ジオルジュ 2025年前期号がまもなく発行予定。5月号ニュース誌と合わせて会員へ配布する。

4. 学術研究部会（辻森・尾上・高嶋・山口）

1) 行事委員会（高嶋・山口）

・2025熊本大会巡検のコース一部変更：Aコース（阿蘇火山：カルデラ形成噴火と後カルデラ活動、案内者 宮縁育夫・星住英夫）のコース内での小規模な変更が提案された。巡検費用については変更なし。（変更理由）露頭の状況が以前と変化しているのと、全体的な時間を考慮して、行程を変更する必要が生じた。

2) 専門部会連絡委員会（尾上）

特になし

3) 国際交流委員会（辻森）

特になし

4) 地質標準化委員会（内野）

特になし

5) 学術戦略WG（尾上）

特になし

6) ショートコースWG（山口）

特になし

5. 編集出版部会（小宮・辻森）

1) 地質学雑誌編集委員会（小宮）

(1) 編集状況報告 (2025年5月13日現在)
・2025年投稿論文: 21 (昨年比-3) [内訳]
総説1 (和文1), 論説11 (和文10,英文1),
報告1 (和文1), レター 2 (和文2), ノー
ト1 (和文1), 巡検案内書6
査読中30, 受理済み6, 入稿・校正中1, 公
開12
2) Island Arc編集委員会 (辻森)
特になし
3) 企画出版委員会 (小宮)
特になし
6. 社会貢献部会 (矢部・岩井・坂口)
1) 地学教育委員会 (岩井)
特になし
2) 地質技術者教育委員会 (加藤)
特になし
3) 生涯教育委員会 (矢部)
特になし
4) 地震火山地質こどもサマースクール (岩
井)
特になし
5) 地質の日 (矢部)
・5/10 (土)「地質の日」オンライン一般講
演会を実施した。当日の同時接続者数は最
大203名, 5/13現在までで1500回以上の視
聴があった。講演時間の超過・調整が課題
となった。講演会に関するアンケート調査
を実施中。23日までにアンケートに答えて
いただいた方にデスクトップ壁紙のプレゼ
ントする。
・5/11 (日) 街中ジオ散歩in Chiba「身近な
地形・地質から探る稲毛海岸の歴史」を幕
張海岸で実施し, 19名の参加があった (1
名キャンセル)。概ね計画通りに実施でき,
参加者からも好評であった。リピーターが
一定数おり, 新しい層に情報が届けられて
いないことが課題と感じられた。また, 今
回のルートでは千葉県環境研究センターな
どとの連携についても今後の課題となっ
た。
・惑星地球フォトコンテスト第16回ほか入選
作品展示会を5/13より東京パークスギャラ
リー (上野) で実施中。
7. その他執行理事会の下に設置される委員会
及び組織

1) 利益相反マネージメント委員会 (亀高)
特になし
2) 若手育成事業検討WG (内野)
特になし
3) 表彰制度検討WG (亀高)
特になし
8. 理事会の下に設置される委員会
1) ジオパーク支援委員会 (矢部)
・委員会を中心に取り組んできた出版企画
「大地と人の物語—地質学でよみとく日本
の伝承」(創元社) が6月に発売される見込
み。
2. 地学オリンピック支援委員会 (坂口)
・日本地学オリンピック日本委員会より, 第
18回大会の地質分野問題作成委員の推薦
依頼があり, 会員1名を推薦した。
3) 支部長連絡会議 (杉田)
特になし
4) 地質災害委員会 (松田)
特になし
5) 名誉会員推薦委員会 (星)
特になし
6) 各賞選考委員会 (亀高)
特になし
7) ジェンダー・ダイバーシティ委員会 (山
口)
特になし
8) 法務委員会 (亀高)
特になし
9) 若手活動運営委員会 (星)
・メーリングリスト的な会員同士で気軽に
コミュニケーションできる手段・ツールが
あると良いとの意見あり。
10) その他
特になし
9. 研究委員会
1) 南極地質研究委員会 (委員長 大和田正
明)
特になし
2) 法地質学研究委員会 (委員長 川村紀子;
杉田)
特になし

審議事項

1. 教科書シリーズの出版に向けた新事業につ
いて (提案) (星)
執行理事会として前向きに進めることが確認
された。教科書の内容については, 従来の基
礎学問以外に分析手法やGISも検討してはと
の意見があった。冊子体 (白黒) での出版を
予定しているが, 授業等での活用を考慮し,
カラーの電子データ版も併せて用意してほし
いとの要望が出された。
2. 2025熊本大会シンポジウム企画の有無につ
いて (高嶋)
執行理事会としてシンポを企画するか否かを
検討した。熊本地震関連のテーマ案等も検討
したが, テーマ設定や必要性を十分に議論・
検討する時間がないことや, 会場確保の問題
などもあり, 今回は見送ることとした。ただ
し, 今後, 執行理事会, 理事会として, 十分
に企画を練って外部にアピールする内容のシ
ンポジウムを企画することは, 重要である
との意見があった。
3. 2027つくば大会会場選定について (高嶋)
経費と利便性の観点から2027年大会は, つく
ば国際会議場を会場に採用することとした。
ただし, 現状案では広めの口頭発表会場が少
ないため, LOCに会場使用計画の再考を依
頼した。
4. AI利用に関する権利委託について (亀高)
地質学雑誌を始めとする学会の著作物をAI
の機械学習の用に供する際, 権利の管理を学
術著作権協会に委託することを承認した。

監事コメント

(岩部) 教科書シリーズの出版は, 学生のみ
ならず社会人にも最新知見を得る機会となる
ため, 是非, 時間をかけて進めて欲しい。再
来年度のつくば大会は, 今よりも費用がかか
ると思うが, 参加費も含め, 会員が満足でき
るようなものにして欲しい。

以上

2025年6月7日

一般社団法人日本地質学会

会長 (代表理事) 山路 敦

署名人 執行理事 亀高正男

入会のご案内

入会ご希望の方は下記の入会申込書を一般社団法人日本地質学会事務局へお送りください。
入会には正会員1名の紹介が必要です。近くに紹介者となるべき会員がない場合は旨お申し出ください。また、初年度の会費は申込書郵送時から時間の間隔をおかずに下記送金先へ速やかにご送金ください。会員としての正式登録は、入会承認後、初年度会費の入金を確認した上でを行い、News誌の送付(4月号から)を開始いたします。

申込書郵送先: 101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6F 一般社団法人日本地質学会
会費送金先: 郵便振替口座 00140-8-28067 一般社団法人日本地質学会
ゆうちょ銀行 ○ー九(ゼロイチキョク)店/当座 0028067 / 一般社団法人日本地質学会 シヤニホシツガツカイ
会費年額: 正会員(一般会員・シニア会員) 12,000円 ※1
正会員(学生会員) 5,000円/年、2年パック会費額: 8000円、3年パック会費額: 9000円 ※2
ジュニア会員 0円(年会費不要) ※3

※1: シニア会員は、入会年度の4月1日時点で65歳以上のかたを対象とします(4/2以降に65歳になる方は次年度からシニア会員となります)。
※2: 学生会員は、次の2点を守って手続して下さい。①学生証の写しを提出すること。②バック制会費を希望の場合は一括納入すること。
※3: ジュニア会員は、正会員の権利は有しません。学術大会での発表はジュニアセッションに限定します。

* 会員番号	* "学記記入欄" : Official use only		
	* 会員種別	☐ 正会員 (☐ 一般 ☐ シニア ☐ 学生)	
		☐ ジュニア会員	

一般社団法人日本地質学会入会申込書

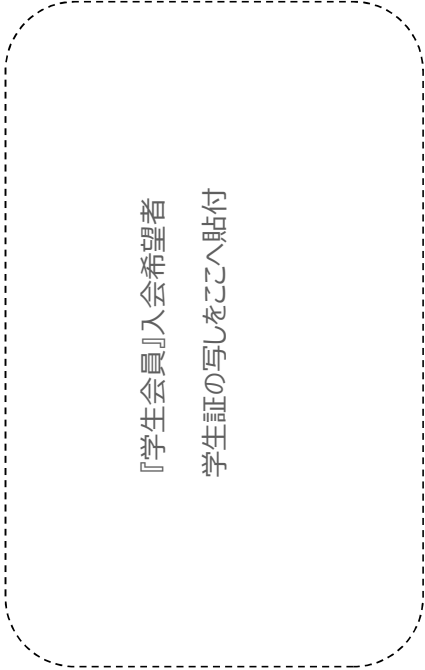
Application form for the Geological Society of Japan

本枠内のみにご記入ください

氏名(ふりがな)	Name in Japanese	ローマ字表記	family name	first name
____年Year ____月Mo ____日Day	生born on	Sex: ☐ 男Male ☐ 女Female	Country:	
学歴 Academic career:				
____学校 High school ____年卒業 Year completed				
____大学 University ____学部 Faculty ____年 ____月 卒業(見込み) Year completed				
修士 Master: ____大学 Univ. ____研究科 Fac. ____年 ____月 修了(見込み) Year completed				
博士 Master: ____大学 Univ. ____研究科 Fac. ____年 ____月 修了(見込み) Year completed				
※学生証の写し忘れずに添えて下さい。				
自宅住所 Home address: (郵便番号 Zip code ____ - ____)				

電話 Phone:	ファックス Fax:
所属機関名称・所属機関住所 Affiliation with address: (郵便番号 Zip code ____ - ____)	
電話 Phone:	ファックス Fax:
e-mail Address: ____@____	
※e-mail Addressは地質学会からのメルマガ配信用。その他連絡用に登録します。携帯電話各社のe-mail Addressを記入の場合は登録いたしません。ご注意ください。 ※所属先(代表)の問い合わせ専用 e-mail Address は記入しないでください。	
連絡先 Correspondence: ☐ 自宅 Home ☐ 所属機関 Office	

* 受付(	年	月	日)	* 承認(	年	月	日)
振替・現金・銀行・他				* 送本(			
巻				号)			



会員情報について: 在会者に限定し、Web版の会員管理システムにて会員情報の検索・閲覧をすることができます。氏名・所属先は掲載必須項目です。下記の項目について掲載を拒否する項目には **□ にチェックを付けてください(チェックが無い項目は掲載承認いただいたものとします)**。

☐ 最終学歴 ☐ 所属先学科名・部課名(掲載不可の場合は「〇〇大学〇〇学部」, 「株式会社〇〇〇〇」までを必須項目として掲載)
☐ 所属先住所 ☐ 所属先電話・FAX番号 ☐ 自宅住所 ☐ 自宅電話・FAX番号 ☐ e-mail Address
紹介者名(正会員) _____ 印
Recommended by (name of member) _____ Signature

(学生のかた) 希望する会費額を選択して下さい。バック制会費選択者は、該当するバック制会費額を一括納入して下さい。
☐ 5,000円(初年度のみ) / ☐ 2年バック: 8,000円(初年度・次年度) / ☐ 3年バック: 9,000円(初年度・次年度・次次年度)
☐ 学生会員として入会希望です。学生証の写しを入会申込書に添えて提出します。

専門部会の選択(任意)
現在、下記の14の専門部会が活動しています。専門部会に参加ご希望の方は登録をお願いします。所属希望の部会を3つまで選択することができます。(該当する項目に○印を付けて下さい)

- | | | | | | | | |
|---------|----------|---------|-----------|-----------|----------|-------|---------|
| 1. 地域地質 | 2. 層序 | 3. 堆積地質 | 4. 海洋地質 | 5. 構造地質 | 6. 岩石 | 7. 火山 | 8. 応用地質 |
| 9. 環境地質 | 10. 情報地質 | 11. 古生物 | 12. 第四紀地質 | 13. 環境変動史 | 14. 鉱物資源 | | |

興味専門分野の選択(任意) あなたの興味専門分野を教えてください。3つまで選択することができます。(該当する項目に○印を付けて下さい)

- | | | | | | | |
|-----------------|-----------|----------|----------|-----------|----------|----------|
| 1. 層位 | 2. 堆積・堆積岩 | 3. 古生物 | 4. 構造地質 | 5. 火山・火山岩 | 6. 深成岩 | 7. 変成岩 |
| 8. 鉱床地質(金属・非金属) | 9. 鉱床 | 10. 鉱物 | 11. 燃料地質 | 12. 地熱 | 13. 第四紀 | 14. 環境地質 |
| 15. 都市地質 | 16. 土木地質 | 17. 土質工学 | 18. 水文地質 | 19. 探査地質 | 20. 土木工学 | 21. 情報地質 |
| 22. 地震地質 | 23. 海洋地質 | 24. 地球物理 | 25. 地球化学 | 26. 地質年代学 | 27. 地理 | 28. 地学教育 |
| 29. 考古学 | 30. その他 | 40. 地球惑星 | | | | |

(注)ご提供いただいた個人情報、日本地質学会プライバシーポリシーに基づき適切に取り扱います。

(金融機関用)

令和 年 月 日

預金口座振替依頼書
自動払込利用申込書(収加)

私は、三井住友カード株式会社から請求された金額を私名義の下記預金口座から
預金口座振替によって支払うこととしたいので、預金口座振替規定を確約のうえ依頼します。

収納代行会社	三井住友カード株式会社 (旧SMBCファイナンスサービス)	振替日 (払込日)	6日・23日(金融機関休業日の場合は翌営業日)
(フリガナ) 申込人名	申込人住所		〒 ☎

ゆうちょ銀行以外の銀行またはゆうちょ銀行のどちらか一方に記入して下さい。

ゆうちょ銀行以外の銀行	金融機関コード	支店コード	預金種目 (どちらかに○印)	口座番号 (右詰めでご記入ください。)
	銀行組合	本店支店	1. 普通 2. 当座	
	(フリガナ) 口座名義人	金融機関 お届け印		

法人の場合は、社名、代表者 役名、氏名を省略せずご記入ください。

お届け印(捺印)
ゆうちょ銀行を除く金融機関へのお届け印ですか
ご注意ください!

ゆうちょ銀行	(フリガナ) 口座名義人	ゆうちょ銀行 お届け印	
	種目コード	契約種別コード	記号(6桁目がある場合は※欄にご記入下さい)
	166301	0	※

払込先口座番号 00110-5-58830 払込先加入者名 三井住友カード株式会社

(収納企業使用欄)

収納企業名	一般社団法人 日本地質学会	料金等の 種類	会費等
契約者番号	委託者コード 18476000	顧客コード 000000	

一預金口座振替規定一 ※ゆうちょ銀行払いは除く。

- 銀行(金庫・組合)に請求書が送付されたときは、私に通知することなく、請求書記載金額を預金口座から引落しのうえ支払ってください。この場合、預金規定または当座勘定規定にかかわらず、預金通帳、同払戻請求書の提出または小切手の提出はしません。
- 振替日において請求書記載金額が預金口座から払戻すことのできる金額(当座貸越を利用できる範囲内の金額を含む)をこえるときは、私に通知することなく、請求書を返却していただきたくありません。
- この契約を解約するときは、私から銀行(金庫・組合)に書面により届出ます。尚、この届出がないまま長期間にわたり会社から請求がない等相当の事由があるときは、特に申出をしない限り、銀行(金庫・組合)はこの契約が終了したものと取扱いさせていただきます。
- この預金口座振替についてかたに紛議が生じても、銀行(金庫・組合)の責めによる場合を除き、銀行(金庫・組合)には迷惑をかけません。

ゆうちょ銀行をご指定の場合は自動払込み規定が適用されます。

(金融機関へお願い)

この預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書に不備がありましたら、不備返却事由欄の該当項目に「印」をつけて速やかに右記不備返却先へご返送ください。

書類の流れ お客様→収納企業→三井住友カード株式会社→金融機関

金融機関使用欄	(不備返却事由)			
	1. 預金(貯金)取引なし 3. 印鑑相違 2. 記載事項等相違 店名、預金種目、口座番号、 通帳記号、通帳番号、口座名義 4. その他()			
	備考			

検印	印鑑照合	受付印	
----	------	-----	--

不備返却先
三井住友カード株式会社
Sライン口座振替係
〒550-0014 大阪府大阪市西区北堀江3-6-11

裏面のりしろ①

101-0032

切手
貼付

一般社団法人日本地質学会
二丁目八―一五 井桁ビル内
東京都千代田区岩本町

裏面のりしろ③

氏名
住所

のりしろ①

オリ線

のりしろ③

裏面のりしろ②

のりしろ②

オリ線

線

線

一般社団法人日本地質学会倫理綱領

2003 年 9 月 19 日 日本地質学会総会制定

2009 年 12 月 5 日 一般社団法人日本地質学会制定 *

日本地質学会の会員は、科学的真理を明らかにする事を目的として、誠実かつ真摯に地質学および関連科学の研究・教育および調査を行う。その成果を広く社会に公表することにより地質学および関連科学の進歩普及を図り、もって社会の発展と人類の福祉に貢献する。会員は、基本的人権を守り、良識かつ品位のある行動をとる。

1. 科学者としての倫理：会員は、専門知識の向上および地質学と関連科学の発展を目指して自己研磨を図る。研究と調査においては、法を遵守し、社会的良識に従って行動する。科学的事実に対しては常に謙虚、誠実でなくてはならない。研究成果と技術上の知見を広く社会に公表し、公表にあたっては先人と他者の業績を尊重する。

2. 知的交流の確保：会員は、国際交流や他分野との交流を進めることを通して学術の向上を図るとともに、研究成果と技術上の知見が科学的に広く吟味・検証されるよう努める。

3. 人類と社会への責務：会員は、その専門知識と技術を適切に活用し、研究と調査の成果を広く社会に提供することを通して社会の発展と人類の福祉に貢献する。

日本地質学会

4. 地球環境への責務：会員は、地球システムの諸現象についての専門家として、地質災害の予知と防止、地球環境の将来予測、資源の適正な活用に関する情報を提供するとともに、専門知識を活かして環境の保全と改善に努める。自らの研究と調査の実施にあたっては環境への影響を最小限にするよう配慮する。

5. 次世代への責務：会員は、地質学と関連科学における学術と技術の継承と発展、次世代を支える人材の育成を図る。研究や調査の成果物、重要な露頭や標本などの科学的遺産の保全に努める。

*2009 年 12 月 5 日法人理事会において、一般社団法人日本地質学会倫理綱領として全文引継を決定。

